

平成24年度

てだこ市民大学 第3期卒業生研究発表会

プログラム

1. 開会行事

- (1) 主催者あいさつ
- (2) 発表会の進め方

2. 全体会 (80 分)

☆代表者の発表 (各学部代表 2 名 計 8 名)

- ① コミュニティビジネス・地域振興学部
- ② 健康福祉・スポーツ振興学部
- ③ 文化振興・教養学部
- ④ 地域・学校支援コーディネーター養成学部

3. 各学部ごとの発表 (60 分)

- ① 代表者以外の発表
- ② 質疑・意見交換
- ③ 学部長による指導助言

4. 閉会行事

- (1) 運営委員長による講評
- (2) 閉会のあいさつ



日 時：平成 25 年 3 月 10 日 (日) 14:00～17:00

場 所：てだこホール市民交流室

主 催：浦添市てだこ市民大学

平成 24 年度

代表発表者

学部名	テーマ	発表者
コミュニティビジネス・地域振興学部	高齢者が地域で楽しく生き生き過ごせる環境づくりを目指して～楽しい食事作りと会食を通して～	稲福英子
	地域の「困った」を地域で解決していく方策 ～新しい公共事業「お助けよろずや」の設立を通して～	下門和政
健康福祉・スポーツ振興学部	高齢社会における地域コミュニティづくりをめざして	上地徳一
	心の病「うつ」を知り大切な命を守る～誰もがなりうる「うつ」について理解し、関わり、繋ぐには～	松田ミサ子
文化振興・教養学部	暮らしの中の沖縄のカタチ ～暮らしの中からつなぐ“沖縄らしさ”	金城香代子
	うらそえの文化を伝えよう！	文化を伝え隊 チーム
地域・学校支援コーディネーター養成学部	～ながら見守り隊をつくろう	金城朱美
	物を大切にする心・思いやりやいたわりの心・命を大切にする心を育むために～日本の伝統文化の生け花・茶道を通して～	玉城敏子



卒業研究



学部名： コミュニティービジネス地域振興学部

氏 名： 稲 福 英 子

1. テーマ

高齢者が地域で楽しく生き生き過ごせる環境づくりを目ざして
～ 楽しい食事作りと会食を通して ～

2. テーマ設定理由

高齢社会、目まぐるしい社会の急激な変化に伴い、それぞれが忙しく、また、人との関わりが以前に比べ大きく変わってきた。テレビや周囲の状況を見ても何となくさびしい思いとこれでもいいのかなと思っていた。そのような矢先、テレビで大宜見村の喜如嘉のおばあさん達がお昼時、自分で栽培した野菜を持ち寄りお料理する光景に出合った。「いつもこうして作って食べているよ」と楽しそうでした。昨今、お年寄りや子ども達の孤食が増えたと聞こえる中、この様子を見たとき、なんと心温かい雰囲気だろうと思った。一日の生活の中で楽しく時間を過ごす食事時、一人住まいのお年寄りが少しでも笑顔で食卓に向かうことの活動ができないものだろうか。

高齢者でも自分ができる事は進んで行き、持っている機能を生かし、一人では難しいことでも複数でおしゃべりをしながら一緒に食事作りを提供できるマーケティングについて考えようと思い本テーマを設定した。

3. 項立て

研究内容

- (1) 高齢者の実態
- (2) 必要度について（アンケートより）
- (3) 実施にあたって
 - ① 条件
 - ② 手法
 - ③ 実践（試み）（地域のkさんと一緒に）
- (4) まとめと課題
- (5) おわりに

※参考資料

1. 卒業研究のテーマ

高齢者が地域で楽しく生き生き過ごせる環境づくりを目ざして

～ 楽しい食事作りと会食を通して ～

学部名：コミュニティービジネス地域振興学部

氏名：稲福英子

2. テーマ設定理由

高齢社会、目まぐるしい社会の急激な変化に伴い、それぞれが忙しく、また、人との関わりが以前に比べ大きく変わってきた。テレビや周囲の状況を見ても何となくさびしい思いとこれでいいのかなと思っていた。そのような矢先、テレビで大宜見村の喜如嘉のおばあさん達がお昼時、自分で栽培した野菜を持ち寄りお料理する光景に出合った。「いつもこうして作って食べているよ」と楽しそうでした。昨今、お年寄りや子ども達の孤食が増えたと聞こえる中、この様子を見たとき、なんと心温かい雰囲気だろうと思った。一日の生活の中で楽しく時間を過ごす食事時、一人住まいのお年寄りが少しでも笑顔で食卓に向かうことの活動ができないものだろうか。

高齢者でも自分ができる事は進んで行い、持っている機能を生かし、一人では難しいことでも複数でおしゃべりをしながら一緒に食事作りを提供できるマーケティングについて考えようと思い本テーマを設定した。

3. 研究内容

1 高齢者の実態

① 65 歳以上の高齢者

国 29,066,130人

県 238,926人

浦添市 154,78人

(平成 22 年時点厚生労働省ホームページより)

高齢人口

別表資料参照 (総務省・統計局ホームページ)



(2) 必要度についてのアンケート

調査対象

下記の方々を対象にアンケートを取って調査した。

- ・地域支援課が主催するいきいき健康クラブに通っている方
- ・地域支援課が主催する介護予防の講演会に参加している方々

○ 年齢：60代～90代

○ 人数：91名

○ 地域：浦添市 40自治会のうち14自治会、宜野湾市から1自治会
アンケートを実施する

表 A-1：年代別性別

性別	60代	70代	80代	90代	合計
男	3	2	0	3	8
女	20	16	41	6	83
合計	23	18	41	9	91

表 A-2：地域

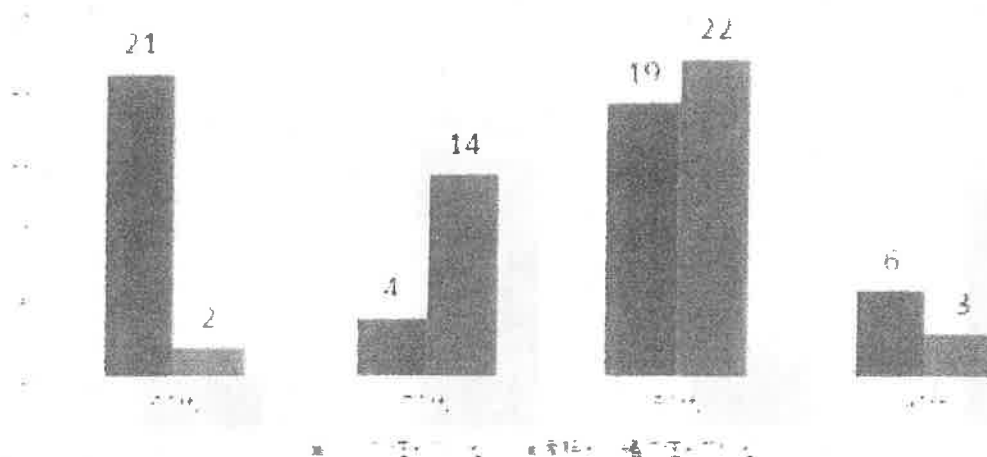
	前田	西原	浦西	内間	屋富祖	沢崎	グリーンハイツ	経塚	当山	勢理客	安波茶	牧港	宜野湾	宮城	港川	合計
数	21	29	4	5	10	5	5	1	3	1	2	1	2	1	1	91

1. 住まいについて

表 1：住まいについて

	60代	70代	80代	90代	合計
一人で住んでいる	21	4	19	6	50
家族と一緒に住んでいる	2	14	22	3	41
合計	23	18	41	9	91

図 1：住まいについて

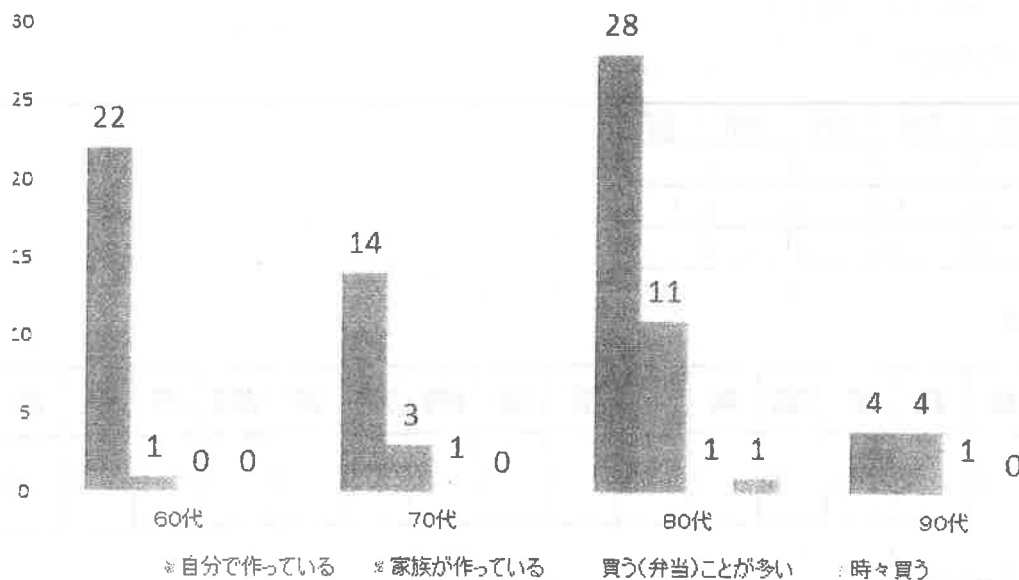


2. 食事を作るにあたって

表2：食事を作るにあたって

	60代	70代	80代	90代	合計
自分で作っている					
家族が作っている					
買う(弁当)ことが多い					
時々買う					
合計					

図2：食事を作るにあたって

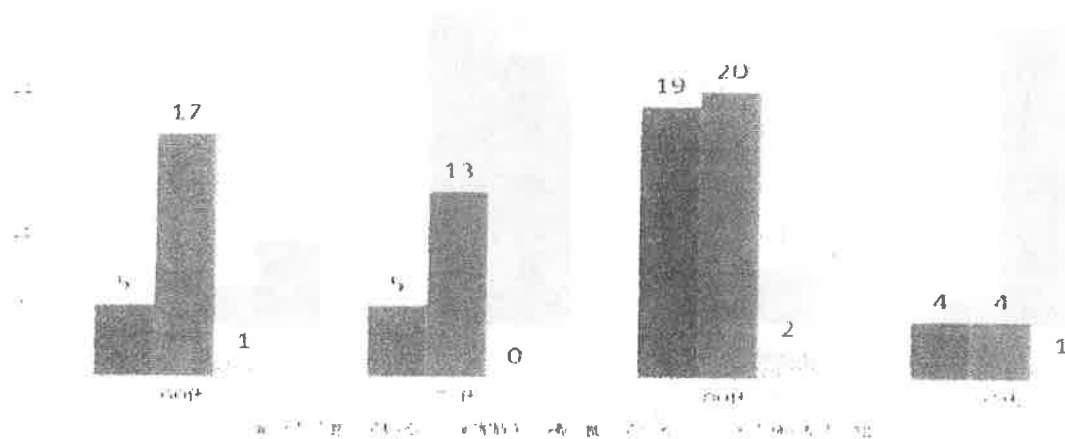


3. 食事の方法

表3：食事の方法

	60代	70代	80代	90代	合計
一人で食っている					
家族と一緒に食っている					
その他(友人、知人)					
合計					

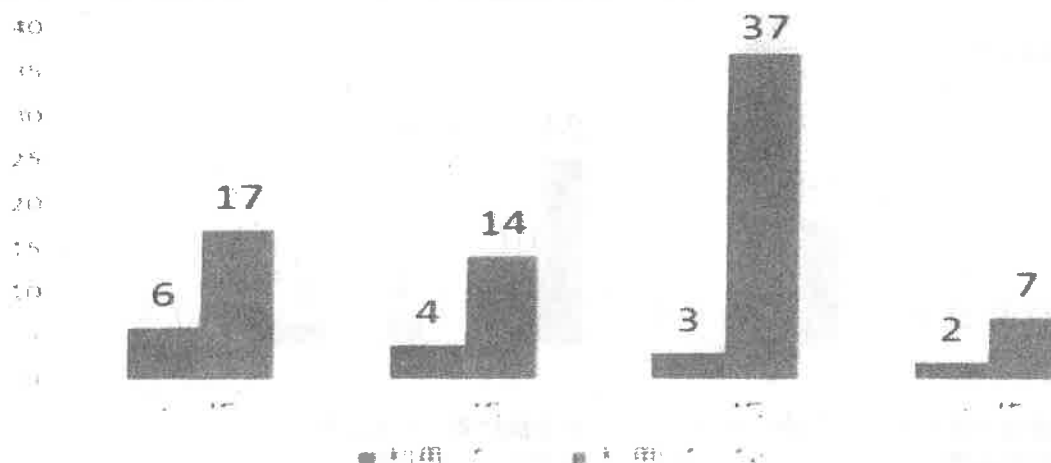
図3：食事の方法



4. 一緒に食事作りのサービスが2時間あるとしたら
表4：一緒に食事作りのサービスが2時間あるとしたら

	60代	70代	80代	90代	合計
利用したい	4	4	3	2	13
利用したくない	17	14	37	7	75
合計	21	18	40	9	90

図4：一緒に食事作りのサービスが2時間あるとしたら

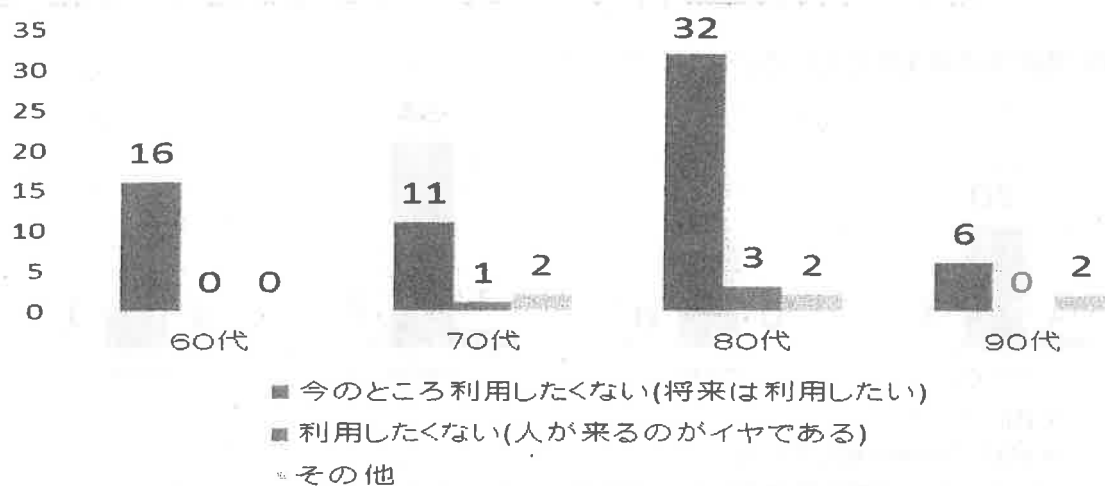


(2) 利用したくないと答えた方へ

表4-2：利用したくないと答えた方へ

	60代	70代	80代	90代	合計
今のところ利用したくない(将来は利用したい)	16	11	32	6	65
利用したくない(人が来るのがイヤである)	0	1	3	0	4
その他	0	2	2	2	6
合計	16	14	37	8	75

図4-2：利用したくないと答えた方へ



5. 買い物について

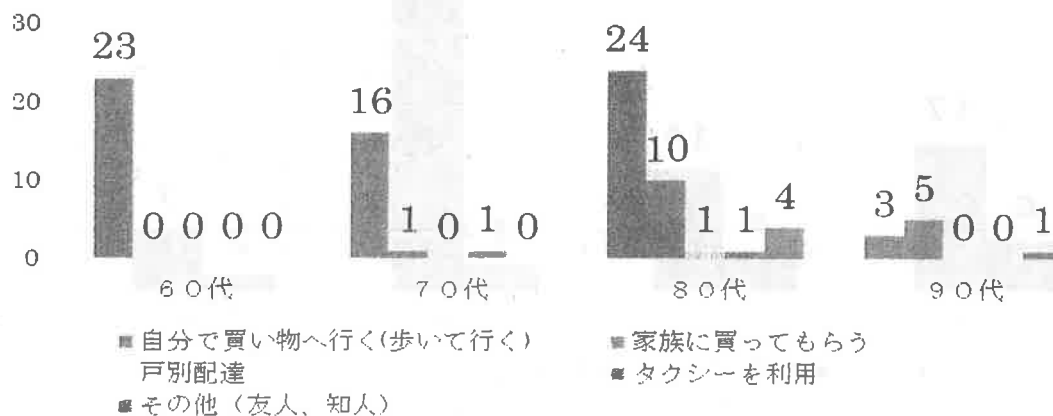
表5：買い物について

5. 買い物について

	60代	70代	80代	90代	合計
自分で買い物へ行く(歩いて行く)	3	0	4	3	10
家族に買ってもらう	0	1	10	5	16
戸別配達	0	0	1	0	1
タクシーを利用	0	1	1	0	2
その他(友人、知人)	0	0	4	1	5
合計	3	1	10	9	23

一人未記入

図5：買い物について

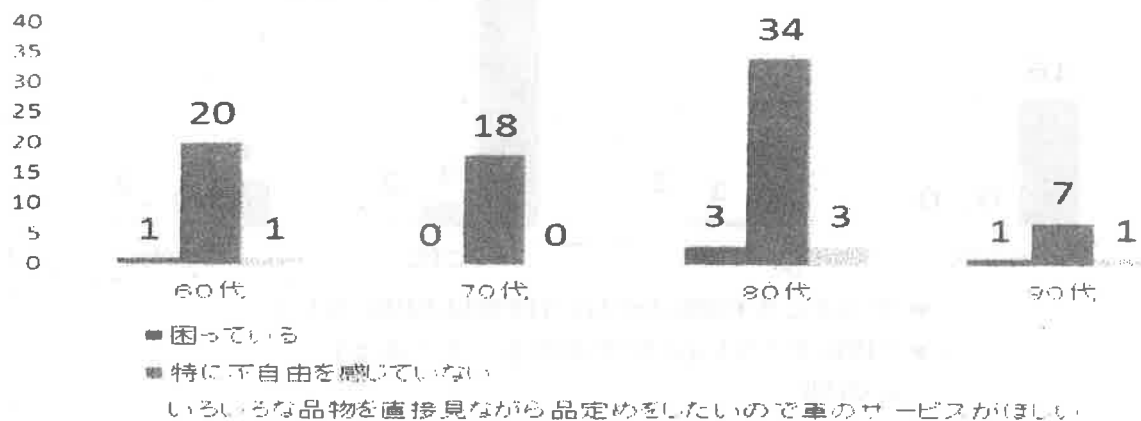


6. 買い物に不自由を感じているかについて

表6：買い物に不自由を感じているかについて

	60代	70代	80代	90代	合計
困っている	1	0	3	1	5
特に不自由を感じていない	20	18	34	7	79
いろいろな品物を直接見ながら品定めをしたいので車のサービスがほしい	1	0	3	1	5
合計	22	18	40	9	89

図6：買い物に不自由を感じているかについて



アンケートの結果より

1. 住まいについては

一人住まいの人が 91 人中 50 名、家族と住んでいる人が 41 名

2. 毎日の食事作りについて

・自分で作っている方が 68 名、家族が作っている方が 19 名、・弁当をよく買うことが多い、時々買うを含めて 4 名となった。

この結果から 75 パーセントの方が自分で作っていることが分かった。その中で 80 歳、90 歳代の方もおり元気な様子が伺えた。

3. 食事の方法について

家族と一緒に食べている方が約 60 パーセント、一人で食べている方が 36 パーセント見られた。

4. 一緒に食事作りが 2 時間あるとしたらについて

利用したい人が 16 パーセント、今のところ利用したくないが将来は考えたいと言う人が 71 パーセントも見られた。

5. 買い物について

自分で買い物に行くは約 73 パーセント、家族に買ってもらうは 17 パーセント。また、タクシーを利用する人 2 パーセント。

6. 買い物に不自由を感じているかについて

不自由を感じている人は 5 パーセントでほとんどの方が不自由を感じていないことが分かった。

7. その他：食事についての意見

○ 食材の利用方法がわかるような調理実習をしたい。(60 歳代)

○ カルシュウムアップについて知りたい (60 歳代)

○ まだまだ元気でボケないように自分で何でもしています。まだまだ大丈夫です。(80 歳代)

○ 今、幸せです。(80 歳代)

アンケートの結果から

アンケートを実施した方々が介護予防のための集いに出かけたり、介護予防の講演を聞いたり、地域やいろいろな場での積極的な活動が功を奏しているのではないかと考えられた。

一緒に食事作りをしたいと望まれている方は、16 パーセントだったが、今後、活用したいと思っている人も多く見られるので、まず、地域の一人住まいの高齢者を対象に一緒に食事作りの実践をし、経過を見たいと思う。

(3) 一緒に食事作りをするマーケティングを実践するにあたって

① 条件

- 元気で身の回りの事ができる 65 歳以上の方
- 食事を一緒に作りたい人

② 手法

- 二人制にする。
- 一日二時間程度
- あまり深入りしない
- 情報の提供 (常に話題をもっておく。)
- 依頼者の家で実施

③ 予想される効果

料理を作る

- (ア) 作る喜びを感じる。
- (イ) いろんな材料や調理を知る。
- (ウ) 環境の変化で人を迎える喜びを感じ、楽しみができる。
- (エ) 料理が偏らない。
- (オ) 料理をつくる意欲がわく。
- (カ) 野菜を調理することで脳が活性化する。
- (キ) 料理の手順を考えることにより工夫することができる。

会食をする

- (ア) 談笑しながら楽しく食事ができる。
- (イ) 情報が増える。
- (ウ) 食欲がわく。
- (エ) 食事の楽しみにできる。
- (オ) コミュニケーションを通し絆を深めることができる。

④ 実践例

平成 25 年 2 月 20 日 (水)

地域の一人住まい 87 歳の K おばあちゃん

メニュー

- 栄養のバランスを考える。
- 塩分、油控えめ、カルシウムやたんぱく質を考慮する。
- 盛り付けを工夫する。

- 1 主食 ごはん 2 主菜 サバの味噌煮 3 副菜 かぼちやの煮物
4 デザート ヨーグルトとフルーツ 5、味噌汁

- ☆ 「〇 〇 さんこんにちは。」
- 〇 「あーい 〇 〇さん。」
- 玄関先でこんな会話をしながらスタートする。
- 〇 「きょう、何作るの。」
- ☆ 「ばあちゃんサバの魚好きですか。」
- 〇 「うん、好きよ。買っても食べるよう。」
- ☆ 「今日一緒に作りましょうね。」
- 〇 「上等さあー。」
- 〇 「わたし、このねぎ切るねー。」
- ☆ 「はい、お願いします。」

参考図



※ 新玉ねぎ、にんにくの葉をお隣さんいただいたそうで、「これもつかっていいよ」アボガドと一緒にあえ物にする。

実践例のまとめ

おしゃべりをしながら、積極的に調理に参加してくださいました。料理が完成すると「こんな料理の仕方わからなかったさー」「私たちこんなにして作らないからよー」「こんなにしてつくらないからさー」「いつもおなじだからよ」「今日はよかった。」とおっしゃっていました。また、かわいい小皿を使ったり、盛り付けにも工夫したので、いつもの雰囲気と違うと言ってとても喜ばれました。

「今日はどうでした？」の間に「とてもおいしかったよ」「おしゃべりもしながらよかった。」「ありがとう」といい笑顔でした。お互いに楽しいひと時を過ごしました。

実践したことで ～ 楽しい食事作りと会食を通して ～のサブテーマに少し手ごたえを感じ取ることができた。

4.本研究のまとめ

アンケートの結果から一緒に食事作りをしてみたいと思う方は91名中15名。今は活用したくないが、将来利用してみたいが75名と多いことが分かった。年を重ねても自分ができる範囲で日々、挑戦することが大事だと思われる。

106歳の昇地三郎氏は挑戦をしなくなると自分自身の幸せを摘み取ることになる。いくつになっても「GO ahead!」それが人生と語っておられる。もう70歳だから、もう80歳だからと上げ膳、下げ膳するのではなく、元気な体であれば作る喜びを味わうことによって日々の生活の活力につながっていくと思われる。

地域の一人住まいのお年寄りを対象に一緒に食事作りを実践した中で「楽しい食事作り」を実感することができたと思う。

5.課題

一緒に食事を作るという場づくり、コミュニケーションを通し人との関わりの拡大をするということが浸透できていないように思われた。

参考文献

- 1、ホームページ総務省統計局
- 2、NHK 今日の料理
- 3、脳を鍛える大人の料理ドリル
- 4 一緒に食べようフォーラム資料
- 5 106歳を越えて、私がいま伝えたいこと

アンケートのご協力願い

朝夕幾分涼しくなってきましたが、沖縄の夏はまだまだ続きそうですが、貴殿におかれましてはお変わりなくお過ごしでしょうか。

私はてだこ市民大学の2年次 稲福英子 と申します。私は、高齢者が食生活を通して、元気にいきいきと楽しく過ごせる手立てはないかとテーマをもち、卒業論文を進めているところですが、実態把握のため下記のアンケートにご協力をお願い致します。

記

年齢 (歳) 性別 (男・女) 地域 ()

下記の事柄に当てはまるところに○印をつけてください。

- 1 住まいについて
 - ① 一人で住んでいる
 - ② 家族と一緒に住んでいる
- 2 食事を作るにあたって
 - ① 自分で作っている
 - ② 家族が作ってくれる
 - ③ 買う(弁当)ことが多い
 - ④ 時々買う(弁当)
- 3 毎日の食事の方法
 - ① 一人で食べている
 - ② 家族と一緒に食べている
 - ③ その他(時々知人、友人と一緒に食べる)
- 4 一緒に食事作りのサービスが2時間位あるとしたら
 - (1) 利用したい
 - (2) 利用したくない

(1) 利用したいと答えた方へ

① 利用したい回数について

ア 一週間に1回

イ 一週間に2回

ウ 一週間に3回

(2) 利用したくないと答えた方へ

① 今のところ必要としない(将来は利用したい。)

② 利用したくない(人が来るのがいやである。)

③ その他

裏面に続く



卒 業 研 究

学部名:コミュニティビジネス・地域振興学部

氏 名:下門 和政

1、テーマ

地域の「困った」を地域で解決していく方策

～新しい公共事業「お助けよろずや」の設立を通して～

2、テーマ設定理由

超高齢化、一人暮らしの高齢者及び高齢者世帯の増加それに伴い福祉・医療の負担が増えそれにより財政が圧迫している今、福祉、福祉と言って自治体から面倒を見てもらうのではなく、少しでも財政の負担を軽減するため、自分達が自分達で自立する仕掛けを考える必要があるのではないか？地域で出来るところの身近な「困りごと」は地域で解決する方向をみいだしたい。

2年間、てだこ市民大学で学んだコミュニティビジネスの知を生かし、私の所属する西原町の老人クラブ（つつじ会）で、小さなサービスお助け隊「よろずや」の設立、交通弱者の交通形態の確保や、特定検診受診率アップのお手伝いをすることで超高齢化社会へ対応していきたい。

3、項立て

1、テーマ設定理由

2、はじめに

3、つつじ会（小波津団地老人会）現状

4、本論

- ① 「新しい公共事業」の考え方について
- ② 小さなサービスお助け隊「よろずや」の設立
- ③ 交通弱者の交通形態の確保への対応
- ④ 特定健診受診率アップへの対応

5、まとめ、

※ 参考文献（資料）

テーマ

地域の「困った」を地域で解決していく方策
～新しい公共事業「お助けよろずや」の設立を通して～

コミュニティビジネス・地域振興学部 2 年次

下門 和政

1、テーマ設定理由

超高齢化、一人暮らしの高齢者及び高齢者世帯の増加それに伴い福祉・医療の負担が増えそれにより財政が圧迫している今、福祉、福祉と言って自治体から面倒を見てもらうのではなく、少しでも財政の負担を軽減するため、自分達が自分達で自立する仕掛けを考える必要があるのではないかと地域で出来るところの身近な「困りごと」は地域で解決する方向をみいだしたい。

2 年間、てだこ市民大学で学んだコミュニティビジネスの知を生かし、私の所属する西原町の老人クラブ（つつじ会）で、小さなサービスお助け隊「よろずや」の設立、交通弱者の交通形態の確保や、特定検診受診率アップのお手伝いをすることで超高齢化社会へ対応していきたい。

2、はじめに

マスコミ等に、度々取り上げられて話題になっている「はっぱビジネス」の元気なお年よりで有名な、徳島県上勝町。人口は2000人余り。高齢化比率48%「半数が高齢者」。一般的に高齢者が増えてくると、一人当たりの医療費も増えてくる。高齢化比率と医療費支出は並んでいくものですが、上勝町では一人当たりの医療費は26万円、徳島県内で支出の一番多い山間部では46万円その差が20万円、また、上勝町では寝たきりの高齢者が非常に少ない。この数字を見ると、高齢者に出番があるということが大切で地域にお役に立つ、地域に期待される、存在感がある、そして元気で頑張れる。それにより病院に行く回数が少なくなり、医療費も抑制され、社会保障費も軽減されている、そのような地域の仕組みづくりが必要ではないかと考える。



3、つつじ会（小波津団地老人クラブ）現状

私の所属する老人クラブは、結成以来30年余りたち、会員の減少が続いたのが大きな課題となった。対応策として、長年老人クラブの名称で親しまれていた、「老人クラブ」という呼び方に抵抗があり、活動に参加者が少ないのも名称が原因ではないか等の多数の意見があり、平成22年度定期総会において「小波津団地つつじ会」と名称を変更された。以後「つつじ会」と呼ぶ。それでも活性化に至らず、さらに会員数も減少し10名に満たず定期総会で休止になる様な危機的状況があった。しかし、24年度に、新会長就任にあたり、会社をリタイアして間もない私とTさんMさんの三名が新会長に呼ばれ「つつじ会活性化のため、手伝いをしてくれ」と声がかかったので理事としてお手伝いをすることになり、最初の仕事は会員の獲得でした。会員獲得の件で、一部会員の反対もあったが、新会長の提案で発想を変え、今まで無料だった会費を年間1000円徴収することにした。すると会費を払ってでも参加したいと62名の方が会員登録をしてくれました。それまでは会員、非会員の線引きが曖昧だった。また、アナウンス不足で入会希望者も躊躇していたが、会費の徴収で明確な線引きが出来た為、潜在的な入会希望者も手を上げてくれた。そして、当初の目標50名をクリアし、現在会員数81名が登録している。現在の活動は県や町の老人クラブ、関連活動はもちろん、新たにつつじ会活性化のため、毎月1回グランド・ゴルフや集会場でのカラオケ大会を行っている。

今後は介護を必要としている方は行政にお任せし、一人暮らしの高齢者や比較的元気な高齢者を中心に、いつまでも若々しく、元気で居られるように、小さなサービスお助け隊「よろずや」、交通弱者の足の確保、そして特定健診受診率アップなど身近な「困った」のお手伝いをしたい。



4、本論

①「新しい公共事業」の考え方

新たな地域的課題（ニーズ）は、採算性に乗りにくい（むしろ乗らない）ものが多く、伝統的には自治体の出番ですが、近年の地方財政は、税収が落ち込む中、膨大な財政赤字に直面し、手が回らないのが実情。少子化や核家族化が進行し人口の流動化が進み高齢者及び高齢者世帯が増加、これら新たな地域的課題を抱える地域そのものが、その地域の住民が、自らあるいは協力して、主体的にこれら課題を解決していくこと、即ち「コミュニティビジネス」の出現が期待されるようになる、地域住民は地域の課題や状況を最もよく知る人であることから、ニーズに基づいた高齢者のための事業を展開することが可能になる。例えば、女性の買い物行動は高齢になってもあまり変わらない。じつにいくつもの準備に基づいて決定がなされている。野菜一つ取っても何日も前から、冷蔵庫をチェックし新聞の折り込みチラシを集め比較し、何日に何がどこで安いかを記憶し、他の店と比較検討し、出かける日時と店を決定する。その際、当日の献立もほぼ決めている。そして店でどの野菜を買うか、見て比較して決定を下す、場合によっては検討の結果その場で別の商品に短時間で変更する、そして数日分の献立までも決定する、まるでスーパーコンピューター「京」の様に。こういうたくさんの迷いと葛藤を繰り返し一つの商品を買い求める。この究極の自己決定が脳を刺激する。この買い物行動がリハビリになり介護予防にもなる、男性よりも女性の平均寿命を高くしている一因だと思う、よって高齢になっても、独り暮らしや高齢者世帯になっても買い物難民にならないように交通手段を確保しなければならない。高齢者は自分たちも、福祉、福祉と言って自治体から面倒を見てもらうのではなく、住み慣れた場所で末永く暮らし続け、終の棲家にするためにも、自分達も知恵を出し、また、地域の住民も共に見守り、支え合う新しい「共助」のネットワークを構築し、「新しい公共事業」の仕掛けを考える必要がある。



② 小さなサービスお助け隊「よろず屋」の設立

今や全国に600万人もいる「買い物弱者」、そして急速に増え続ける「一人暮らしの高齢者世帯」そんな人たちの高齢化が進むニッポン社会を、少しでも豊かで便利に変えていく、高齢者を支える新たな取り組み、おやじ力を結集し自治会内60歳以上の男性を対象にした組織「つつじ会・よろず屋」を立ち上げる。「何でも屋」集団として活動し、依頼の内容に応じて都合の良い人が得意分野の作業活動をする。気軽にだれでも参加できる組織づくりを計画し、長年培った経験や知識、技術を地域で生かしてもらい少しずつ事業を拡大いく。

よろず屋は、小波津団地在住者を対象に登録制で実施し事務局を自治会事務所に置き、独り暮らしの高齢者などから依頼を受けた後、各メンバーと連絡を取り、出向くシステムを予定している。メンバーは年度ごとに更新する。

ボランティアとしての作業は、さまざまな内容を想定。家庭の電球や蛍光灯の交換など小さなことから、家具の配置換え、屋根や網戸の修理、庭の草刈り、重い物の移動、困っている高齢者らの依頼に気軽に対応していく。

ボランティアは有償で行い、料金の設定はシルバー人材センターの料金設定を基準に少し低めの低料金でおこなう。



③ 交通弱者の交通形態の確保への対応

小波津団地自治会（つつじ会）では、少子化、核家族化が進行し人口の流動化が進み高齢者や高齢者世帯の増加や、その他高齢者運転免許自主返納制度により、自家用車を手放す人も増えてくる。衣食住に加え、交通も住民の当り前の権利になる。そして多くの会員が将来的に孤立感に不安を感じ、買い物や通院の交通手段確保に多くの会員が、交通システムの確立に期待をしている。

西原町では平成20年9月～11月の3ヶ月にかけて乗合タクシー・バス（コミュニティーバス）運行実証実験を行ったが、利用者の利便性や幅広い多くのニーズに答える為、対象者を小学生から高齢者まで、モノレール首里駅～西原マリパークまでの約8km区間、早朝（6時半）から夜（9時半）遅くまで運行した、それにより逆に非効率な運営になり多大な経費負担になり、実証実験の利用者が採算ベースの約50%、見込みの約60%と採算的にはきびしい結果であった。

見込み客 160 人/日

採算ベース 200 人/日

実証実験結果

1日当たりの利用者 99 人

1台あたりの利用者 2.9 人

稼働率 29 %

収支計

運賃収入	170 万	燃料代	39 万
広告収入	80 万	人件費	240 万
町からの補助	150 万	維持費	121 万
収入合計	400 万	経費計	400 万

従来のコミュニティーバスは時間や路線、目的地などの地域住民のニーズに合致していなかったと思われる。

今後は交通手段に不便をきたしている交通弱者に、自宅や指定の場所から目的地（戸口から戸口：エリア指定あり）まで、高齢者に対象者を絞り、日常生活の維持に向けて、買い物、通院、公共施設、金融機関、への立ち寄りを支援する、デマンド型乗合タクシーの実現を試みて見たいと思う。

デマンド型乗合タクシー

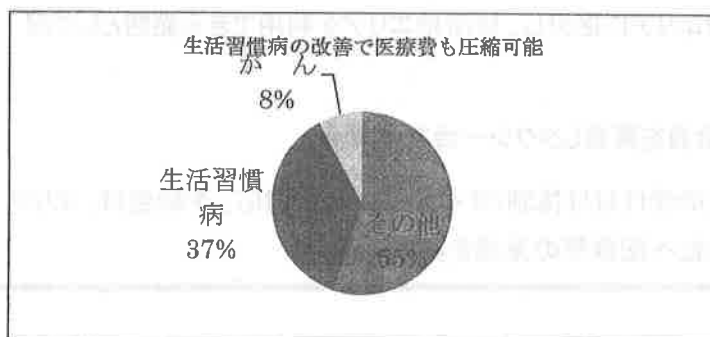
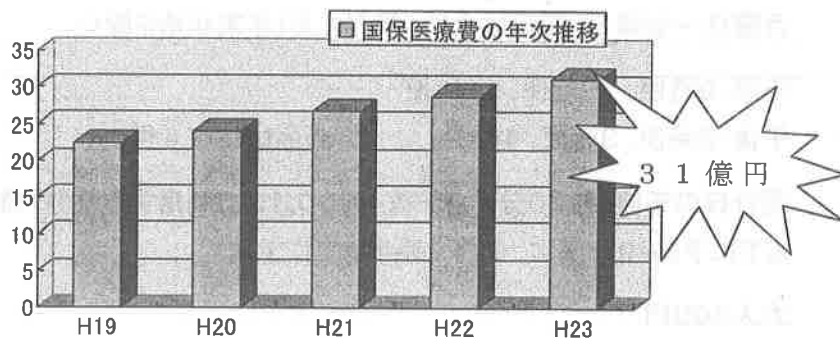
項 目	概 要
1.デマンドタクシーとは	日常生活での移動を補助するシステムとして、電話予約により、自宅から目的地(医療機関、主な公共施設、金融機関、商業施設等)まで、乗合により送迎。利用対象は高齢者、(事前に会員登録が必要)。
2.運行日	月曜日～金曜日 祝日は今後、検討する(年末年始を除く)
3.時刻表	午前:9時便、10時便、11時便 午後:2時便、3時便、4時便 (当面は往復 6 便)
4.予約受付	運行日の午前7時30分から午後4時30分まで利用する便の1時間前までに予約(9時便は、午前 7 時半までに予約)。
5.利用料金	大人300円 チケット制(6枚綴り回数券を販売)利用者が増えれば。
6.エリア区分	西原地区を2エリアに区分し、住所地エリアを利用できる範囲として限定。
会員登録制	自治会にて会員を募集しタクシー会社へ報告。
8.予約センター	タクシー会社の受け付け体制(オペレーター)で対応。予約受付、エリアのタクシー会社へ配車等の業務を実施。

超高齢社会を迎えた自治体にとって避けられない課題である。しかし、自治体による赤字補填を伴う仕組みでは、導入に二の足を踏む自治体も少なからずあるはずである。自治体にとって負担のかからないデマンド型乗合タクシーの仕組みが必要ではないか。解決すべき多くの課題を抱えるが、地域のタクシー会社が主役となる民活型のデマンド型乗合タクシーの基本的な仕組みは、タクシーの「相乗り」の活用で、交通弱者に事前登録と事前予約を求め、通常のタクシーの稼働率が低下する日中などの時間に限って、乗車地点が近い3～4名の利用者を次々と同乗させて、同乗者が割り勘で支払ができる「相乗り」の仕組みです。

交通弱者のあらゆる移動ニーズに応えようとする、今までの仕組みでは複雑になり、その管理運営には大きな経費や負担がかかってしまう。交通弱者の日常生活圏での買い物や通院など支援する移動サービスに特化すれば、時間帯、運行範囲など限定することが出来き、今までタクシー利用を控えていた交通弱者の需要の掘り起こしにもつながり、稼働率をアップさせたいタクシー会社も収益面でもプラスになるのではないのでしょうか。

④ 特定健診受診率アップへの対応

西原町の1か月に医療費は約2億3千万円



予防可能な生活習慣病（高血圧・糖尿病など）とがんだけで、約5割の医療費がかかっている、この部分を改善すれば医療費も軽減できる。10億円とつば

西原町の総人口のうち国保被保険者数・健診受診者数（平成23年度）

男				割合	女				割合
年齢	総人口	国保人口	受診者数		年齢	総人口	国保人口	受診者数	
40～44	1,155	370	57	15,4%	40～44	1,166	309	48	15,5%
45～49	1,093	363	63	17,4%	45～49	1,034	297	60	20,2%
50～54	1,119	430	93	21,6%	50～54	1,128	340	87	25,6%
55～59	1,279	554	131	23,6%	55～59	1,254	464	141	30,4%
60～64	1,114	557	224	40,2%	60～64	1,089	593	323	54,5%
65～69	680	505	241	47,7%	65～69	670	511	258	50,5%
70～74	691	554	300	54,2%	70～74	655	493	279	56,6%

かつて長寿県日本一を誇った沖縄、今は肥満率や65歳以下の早世率がワースト1位、新規に人工透析を受ける方が全国平均の2倍等、とてもショッキングな状況になっている。

西原町でも平成23年度医療費が30億円を突破し24年度の予測では33億円を超えるのは間違いなく、それにより財政の悪化を招いている。特定健診の受診率向上は、医療費の抑制につながり、国保財政の健全化の鍵になると思われる。

西原町の受診率改善の取り組み及び問題点（改善）

改善取り組み状況

- ① 健診の個別案内、健診案内をわかりやすく工夫し作成、
- ② 各集団検診の前に各行政区ごとに個別の受診勧奨や未受診者健診、特に長期未受診者（3年以上）を対象に個別訪問による受診勧告、
- ③ 未受診者健診（日曜健診）の前に日中・夜間の電話による受診勧奨
- ④ 過去の健診結果から、健診結果が悪く特定健診を受診していない方を対象に保健師・栄養士による受診勧奨
- ⑤ 「健康づくり推進員、」を育成し、地域の推進員による受診勧奨
- ⑥ 人間ドック契約医療機関を増やし、受診者の選択幅を広げる、
- ⑦ 横断幕やのぼりの掲示による受診の呼びかけ、
- ⑧ 各自治体の広報マイクや広報車による受診案内
- ⑨ 広報紙へ特定健診や町の健診結果について記載、
- ⑩ 各種団体（自治会長会／民生委員・母子推進員）や機関への受診勧奨の呼びかけ、

問題点（課題）

- ・ 様々な受診対策を行っているが、受診率が37%台で伸び悩んでいること
特に長期の未受診者は訪問等により受診案内をしても受診につながらない
- ・ 40歳～74歳の受診者の健康結果を見ると、3人に1人が糖尿病または糖尿病予備軍に該当しており、若年者の健診結果では、20代で糖尿病の検査項目に男女ともに1割の方が異常値をきたしており、将来の糖尿病のリスクを抱えている方がいる。
- ・ 国保の総医療費、1人あたりの医療費は毎年増加しており、その医療費の半分は予防可能な生活習慣病等の疾病が占められており、個々人が健診等で自分の健康状態を把握し、生活習慣病予防に努める必要がある。

これからの取り組みとして、自治会の会報や放送での告知の徹底、比較的に近隣世帯のコミュニケーションも取れているので自治会・婦人会・老人会そしてとなり近所での声掛け、また、「健康づくり推進委員」を選任し、未受診者への声掛けを徹底する。

5、まとめ

現在、各地域の老人クラブも同様に会員数が減少傾向にあり、とりわけ定年して間もない若い高齢者が加入しない傾向にある。これは定年を過ぎても働く人が多くなったことや、「自分はまだまだ若い」という意識から、老人クラブへの加入に抵抗を感じる人が多いことが要因であると思われる。また、現役時代にやりたくてもやれなかった事にチャレンジしたり、長年培ってきた技術の向上など、生涯学習に取り組む人も多く見られる。こうした若い高齢者に地域のために活動する老人クラブの魅力や価値を伝え、少しでも多くの高齢者に参加してもらうことも今後の課題である。そのためには、例えばこれまで働いてきた知恵を出し合い、地域の人たちに役立つような、コミュニティビジネスを展開するなど、若い高齢者が入りこみやすく、時代の流れに合った活動を取り入れることも必要だと思われる。

「人生85年時代」において、一人一人の人生を豊かなものにしていくためには、他者とのつながりを基盤としたコミュニティにおいて、様々な世代の人々が支え合っているよう、改めて地域社会における人のつながりを再生していくことが今後の重要な課題と思われる。

「人間の究極の幸せとは、愛されること、ほめられること、役にたつこと、必要とされること。働くことによって愛以外の四つの幸せが得られる。」

※ 参考文献（資料）

株式会社いろどり ホームページ

日本総合研究所 「研究員のこころ」より

樋口恵子著 大介護時代を生きる

茨城県桜川市ホームページ デマンド型乗合タクシー

西原町ホームページ 健康推進課

国民健康保険係

保険予防係

小波津団地自治会（会報）



卒業研究

学部名：健康福祉・スポーツ振興

学部

氏名：上地 徳一

1. テーマ

高齢化社会における地域コミュニティづくりを目指して

2. テーマ設定理由

私の住む浦添グリーンハイツ地域では高齢化の波が押し寄せ 2012年現在高齢化率が28%と市内第4番目の高さとなっている。

高齢化の進む中で、健康問題や生活等の不具合がより多く生じてくると思われる。安心・安全で住みよい環境づくりをしていくため 援護を必要とする高齢者や障がい者等の手助けをしていかなければならないと痛感している。

そこで まず 要援護者のMAPづくりや小さなお助けマン運動から取り組む必要があると考え 本テーマとした。

3. 項立て (概要でも良い)

I. 設定理由

II. 研究内容

1. 自治会の紹介
2. 本題MAPづくり「要援護者」とは何か
3. 先進地の調査から
4. 実践活動
 - (1) 要援護者支援会議
 - (2) 小さな親切運動＝高齢者世帯への「お助けマン」運動
 - (3) さわやか地域相談室の開設
 - (4) 自治会活動
 - (5) グリーンハイツ若竹会（老人会）への加入
5. 成果と課題
6. 今後の対応（計画・実践）

III. 終わりに

*参考資料

「高齢化社会における地域コミュニティづくりを目指して」

学部名 : 健康福祉・スポーツ振興学部
氏名 : 上地 徳一

I. 設定理由

私の住む浦添グリーンハイツ地域では高齢化の波が押し寄せ、平成24年11月現在高齢化率が28%と市内4番目の高さとなっている。危惧するところである。高齢化の進む中で、健康問題や生活等の不具合がより多く生じてくると思われる。安心・安全で住みよい環境づくりをしていくため 援護を必要とする高齢者や障がい者等の手助けをしていかなければならないと痛感している。

そこで まず 要援護者のMAPづくりや小さなお助けマン運動から取り組む必要があると考え 本テーマとした。

II. 研究内容

1. 浦添グリーンハイツ自治会の紹介

① 環境

周りは小高い丘があり、グリーン帯が眺望でき、経塚公園や前田公園予定地がある。近隣には 小中校、国際センターなどの公共施設や 福祉施設として 社会福祉法人「ありあけの里」や、「沖縄療育園」、就労センター「わかたけ」などが存在する。大型スーパー サンエー経塚シティも近くにある。組踊りの祖である玉城朝薫の墓が隣接し、近い将来 モノレールの建設も予定され、「経塚駅」が建設される予定である。

② 人口 (H24.11.1.現在) (浦添市h/pより)

0～64歳	1,279人		
65～69歳	108人		
70～74歳	101人		
75歳以上	275人	75～79	69人
合計	1,763人	80～89	112人
総世帯数	716世帯	90～	94人
高齢化率	* 28%		

* ありあけの里の入居者 160世帯/160名(平均年齢 90歳)も含まれ
高齢化率を上げている要因(情報提供: ありあけの里)

* (参考: ありあけの里を除いた高齢化率: 21%)

* 浦添市高齢化率 15%

③ 自治会加入率 (H24. 11. 1現在)

総世帯数	716戸
加入者数	312人
加入率	* 44%

* 総世帯数は ありあけの里入居者 160世帯を含む

* (ありあけの里を除いた加入率: 56%)

④ 主な活動

● 定型事業

- ・夏祭り盆踊りの夕べ
- ・敬老会
- ・グランドゴルフ大会
- ・新年会 & 成人祝
- ・自治会通信の月間誌発行他

● 企画事業

- ・まちづくり推進活動
- ・ふれあいガーデン建設
- ・交通安全対策推進活動
- ・地域子供学習支援活動
- ・班別懇親会の推進 他

2. 本題MAPづくり「要援護者」とは何か

災害時等において、安全な場所に避難する際に支援を要する人のことで、高齢者をはじめ、障がい者、乳幼児、妊婦などが挙げられる。

(実用日本語表現辞典 より)

「浦添市・災害時要援護者避難支援計画」での「要援護者の範囲」を引用すれば

- 災害時において自力での避難が困難な者
- 同居親族等による避難支援が受けられがたい者
- 現に避難支援が必要と思われる者 ……で

次の者を対象にする。

- ・高齢者 = 65歳以上で、独居者/高齢者のみの世帯や 要介護者
- ・障がい者等 = 身体障がい者・知的障がい者・精神障がい者・難病者
- ・その他 = その他必要と認める者

災害時等を含む通常時においても 支援が必要な独居 及び 障がい者等の情報を把握し、地域での支援体制づくりに取り組んでいかなければならない。

具体的には「気になる人」の情報収集→個別訪問→地域ネットワーク台帳作成→ MAPづくり→ 具体的支援体制の推進…を図っていくこと。

現状として 我々浦添グリーンハイツ自治会は「要援護者支援会議」を通して取り組んでいる。



←要援護者支援会議
のメンバー

(2011/11)

沖縄県介護実習・
普及センターでの
研修会 (2012/3)



3・先進地の調査から

(1) 港川中学校区要援護者ネットワーク委員会の事例

＜報告書 及び 港川中学校区CSWへの聞き取りによる、H24. 12. 10＞

港川中学校区では、市内他の4中学校区に先駆けて、平成20年に
全国社会福祉協議会より 民生委員児童委員活動振興事業の
活動助成(2年間)を受け、要援護者に対し、「災害に備えた日常的な
取組」「見守りネットワークの構築化」を柱に取組をスタートさせている。
この振興事業は 平成20年度～平成21年度の2年間の活動である。

＜ 主な活動 ＞

- ① 平成20年10月 : 「港川中学校区要援護者ネットワーク委員会」の設立
- ・要援護者が安全 且つ迅速に避難が図れるための支援体制の整備
 - ・通常時からの見守り支援 及び ネットワークづくり 等

- ② 平成20年11月 ～ 21年2月 : 「要援護者マップづくり」
- ・全国民生・児童委員連絡協議会の補助事業として 港川中学校区が選ばれた。
 - ・地域エリア 要援護者や 社会資源など マップへの落とし込み作業

*この結果

- ・民・児委員の役割・連携の必要性＝確認できた。
- ・地域協力者と 情報の共有ができた。

- ③ 地域支え合い講座の開催

- ・伊祖自治会 4回 (平成21年10月1日～同年10月18日)
- ・牧港自治会 4回 (平成22年1月14日～同年1月31日)

*この結果

- ・「地域福祉支援ネットワークづくり」の重要性を学んだ。

- ④ 平成22年1月 : 災害時要援護者・牧港住民避難訓練 の実施

- ・150名参加
- ・おかゆの炊き出し

↓
訓練の成果発揮

平成22年2月27日未明 当地で震度5の地震体験＝実際にあった事

↓
担当地区全委員が要援護者への迅速な安否確認ができた。
避難訓練の成果が即発揮できたのは最大の自信に繋がった。

2か年の活動は

- ・「港川中学校区全域で「安全で、安心して暮らせる地域づくり」推進に大きく貢献
- ↓
- ・民・児一人一人が、地域における委員活動の役割、地域住民ニーズ 及び ネットワークづくりの重要性など 再確認することができた。

現在は構築してきた「地域福祉ネットワーク」の見直しや「地域ネットワーク台帳」などの見直し作業に取り組んでいる。

(2) 宜野湾市 伊佐区自治会 の事例

< 自治会長 宮城奈々子氏 への聞き取り(H25. 1. 18)及び H/Pより >

「災害に強い伊佐区をめざして」

< 自治会概況 >

- ・会長 宮城奈々子氏 (歴 7年余)
- ・人口 3,978 人 (平成24年7月現在)
- ・世帯 1,728 戸
- ・高齢化率 14%
- ・要援護者数 24名 (宜野湾市 総計40名)
- ・海拔 2M (津波に最も危険な地域)

< 主な活動 >

- ① 平成18年 伊佐地区支え合い活動委員会 設立
- ② 平成19年9月 沖縄県社会福祉協議会 → 伊佐区へ「災害時避難所運営シュミレーション」モデル地区へ指定、事業がスタート
大がかりな2本立ての事業を決定
○ 避難訓練 ○ 避難所生活シュミレーション
- ③ 平成19年11月 津波避難訓練 を実施
400名余参加
- ④ 平成20年1月 避難所生活シュミレーション では
・長期化する避難所生活を体験 ・130名余参加
・避難所運営組織の立ち上げ など

< 現在の活動 >

- ① 成年祝いの開催 : 毎年2月実施
・案内状を個別配布して「気になる人」探しを兼ねている
- ② 地域支え合い活動委員会
・防犯、減災、挨拶＝声かけ運動、自治会加入運動 など
・「毎朝9時コール」の実施(要援護者5人対象)
・チラシ作成:「あなたの”気づき”アンテナ立っていますか？」
などの呼びかけで多くの地域住民に協力を求める運動
- ③ 平成25年2月23日: 区民・西海岸全地域の大型避難訓練 を実施済
・最大動員: 警察・消防・宜野湾市社協 他
・基地内(キャンプフォスター)避難ルートを初めて実践踏査
(小生もキャンプフォスター避難ルートに参加)
- ④ その他 ・平成24年 避難ビルの指定(沖産業...)や
避難場所の指定...普天間中学校(=目標、課題→距離が遠い)
・基地内(キャンプフォスター)通り抜けの避難ルート確立
・自主防災組織の充実化
・災害時等避難マップ...新たなデータ追加作成中
・緊急避難ビルの建築を要請中...北谷町側5F以上のビルなし

4. 実践活動

平成22年に提出した「てだこ市民大学」入学願書のなかで 研究テーマとして「MAPづくり」を明記し、入学後 市民大学講義の中でも意識しながら、達成するための地域活動をスタートさせた。次は 主な活動である。

(1) 要援護者支援会議

＜開催＞2ヶ月に1回

＜会議構成メンバー＞自治会長・浦添市社協(CSW2名)・民生・児童委員(2名)
地域相談員(4名)・婦人会(2名) 計11名

＜目的＞地域行政区における災害時の支援ネットワークの仕組みづくり(最終的には浦添中学校区に拡大することを目標)。

＜活動＞地域ネットワーク台帳の作成 と具体的支援方法・活動の策定。

このため 平常時からの見守り活動が重要で、「気になる人」の情報収集に努める。

個人情報問題が全面に出てくるため情報収集は壁にぶつかる事もあるが、地域住民と日頃からより多く接することで、解決の糸口は見いだせるものである。「気になる人」へのアプローチは主にCSW・民児委員が実施し、台帳に反映させていく。当会議は要援護者MAPづくりのための柱となる。

(2) 小さな親切運動＝高齢者世帯への「お助けマン」運動

地域高齢者とのコミュニケーションの場、情報収集の場ともなり、依頼があれば有志で行って 庭木の剪定や庭清掃・ゴミだしなど実施。当活動は昨年からスタートしたが 宣伝活動が今一つ徹底されず実行件数は5件どまりであった。

小生の所属する地域の若竹会(老人会)の定例会などで呼びかけている。一層の情報活動が幸を奏するものと期待している。需要はかなりあるものと推測している。「お助けマン」の組織化も自治会を通して検討中であるが早期設置を支援していく。

(3) さわやか地域福祉相談室の開設取組み

浦添市社協からの呼びかけ(H24・9・28)があり、手挙げ方式ながら小地域福祉活動活性化モデル助成事業「浦添グリーンハイツ自治会福祉相談室」を立ち上げることとなった。「気になる人」探しに大いに役立つものと期待している。

- ・要援護者支援会議のメンバーが相談員となる。
- ・事業内容は自治会内に福祉相談室を設置し地域住民に対し福祉関連の相談を受け付け、解決に向けて、浦添市社協等の様々な機関と連携しながら、お役に立つ情報を提供していく。
- ・現制度では、浦添中学校区地域保健福祉センターが担っているが、地域住民へのさらなる細かなサービス提供を充実させるため、当自治会が行う。
- ・開設のため、地域相談員のスキルアップ養成講座を開催済み。以下を参照のこと。

第一回目 「誰もが安心して暮らせるまちづくりを目指して…浦添市協の活動を通して…」

(平成24・12・10実施 講師・浦添市社協 地域福祉推進課長
中本 昌幸 氏)

第2回目 「地域のまちづくりをめざして 今求められる地域力とは…
—地域での支え合いと相談活動—」

(平成24・12・17実施 講師・かみざと社会福祉研究所
神里 博武 氏)

・平成25年4月開設予定 (現在取組中)

(4) 自治会活動

”生涯役員”の心づもりで、自治会活動に参画し、目指す「テーマ」を完成させていく計画であるが、前述(1)～(3)の他 以下は 主な活動である。

●定型事業への参加(1. ④主な活動 参照)

●企画事業への参加

・まちづくり委員会

・平成23年度 浦添市の「花と緑のまちづくりフェスタ事業」の完遂
地域メイン通りの歩道へ黒木30本の植栽とランの花の着生作業、
ミニサンダンカなどの植えつけ等

・それらの維持・管理(うらそえ美らまちサポーターに登録・活動中)

・ふれあいガーデンの建設事業・約400坪 (平成25年4月 開設予定)
～園芸福祉の農園をめざして～ 急ピッチの作業が進行中

・班別懇親会開催(年1回)

・公民館講座(園芸講座＝園芸の基礎知識と実践技術の習得)

平成24年 2期 累計10回開催

学習目標＝「花と緑のまちづくり」をめざして

・おじさん会(中高年対象)の定期開催(年4回)

(5) 若竹会(地域老人会)への加入

平成24年4月 グリーンハイツ若竹会へ加入した。

目的としては 高齢者の多い当会に入り、顔見知りとなり コミュニケートすることで信頼され、そして周囲の情報収集(MAPづくりのための情報)に役立つと 判断したからである。月間2回開催の定例会の準備作業及びかたづけ作業が主な仕事であるが現状での準備作業は 下図から理解できるようにかなり高齢者集団のため、小生の役割となっている。そのほか 空き缶置き場の整理整頓作業がある。

平成25年度は、会員の誘致(特に熟年層)と、高齢者にできる簡単なスポーツを導入し、安全・安心で明るい楽しい老人会にしたい。

沖縄県は 全国上位の長寿県と言われながら 実態は 平均寿命と 健康寿命の かい離が大きすぎ問題である。健康寿命を伸ばしていく対策を考えなければならない。

<若竹会年齢構成表> (H.24.4.1.現在)

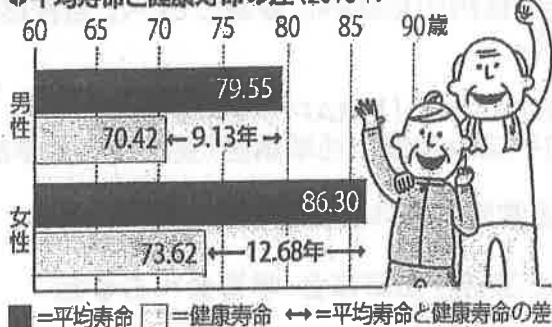
	男	女	合 計
65歳以上	1	2	3
70歳以上	6	21	27
80歳以上	7	15	22
90歳以上	2	0	2
合 計	* 16名	38名	54名
平均年齢	81歳	77歳	79歳

* 男性は77歳以上が15名

2010年の健康寿命(厚労省)

男性	女性
都道府県 年	都道府県 年
1 愛知 71.74	1 静岡 75.32
2 静岡 71.68	2 群馬 75.27
3 千葉 71.62	3 愛知 74.93
4 茨城 71.32	4 沖縄 74.86
5 山梨 71.20	5 栃木 74.86
6 長野 71.17	6 群馬 74.64
7 鹿児島 71.14	7 茨城 74.62
8 福井 71.11	8 宮崎 74.62
9 石川 71.10	9 石川 74.54
10 群馬 71.07	10 鹿児島 74.51
11 宮崎 71.06	11 福井 74.49
12 神奈川 70.90	12 山梨 74.47
13 岐阜 70.89	13 神奈川 74.36
14 沖縄 70.81	14 富山 74.36
15 山形 70.78	15 岐阜 74.15

平均寿命と健康寿命の差(2010年)



沖縄県 平均寿命と健康寿命の差(2010年)

男性	70.81	78.64	← 07.83 →
女性	74.86	86.88	← 12.02 →

5. 成果と課題

<成果>

当自治会では平成22年7月から 第一回目の要援護者支援会議を開催しており平成24年11月で14回目を迎えた。
この間の活動結果として、合計20名が登録名簿に登録され、地域ネットワーク台帳も17件が完成している。浦添中学校区・10行政区の中で登録数は 最も多い。登録件数が多いからといって喜んでいいはずもないが、現実には潜在需要(?)はもっとあるのではないかと推測する。自治会や老人会・婦人会・ふれあいサロンなどでさらなる周知をする必要がある。

災害時等要援護者登録者名簿：浦添中学校区別推進状況 (市社協 資料)

No.	自治会名	登録者数	ネットワーク台帳作成数
1	浦添グリーンハイツ自治会	20	17
2	仲間自治会	2	1
3	安波茶自治会	3	0
4	経塚自治会	3	0
5	前田自治会	5	1
6	前田公務員宿舎自治会	0	0
7	茶山自治会	1	0
8	浦添ニュータウン自治会	2	0
9	浦添ハイツ自治会	0	0
10	県営経塚団地自治会	7	2
計	10 自治会	43	21

(平成24年9月末現在)

<課題>

- ①「地域ネットワーク台帳」の作成作業は 3分の1の道のりに過ぎず、継続した今後の取組が重要。
- ②個人情報関連の絡みで情報収集が困難
- ③要援護者を支援する地域相談員・協力者の拡充のための呼びかけを定期的に
- ④登録名簿やネットワーク台帳の更新や見直しが疎かになりがち
- ⑤要援護者・支援者間で今後協議が必要となるが個人情報管理上慎重な対応が必要
- ⑥要援護者の発掘作業には「要援護者支援会議」の全員の最大限の協力が求められる。

6. 今後の対応

これまでの活動や 今後の対応としての以下の活動は 自治会・地域住民や、関係機関等との協働ではじめて成しうるものであるので、小地域(自治会単体)での作業をまず優先して取り組んでいくことが大事であると思われる。体制づくり作業にある程度目途のついた時点で、浦添中学校区内の取組みに参画していく。当校区内の取組は浦添市や市社協の目指すところである。

- ① 要援護者MAPづくりとMAPの活用の推進
具体的手法の学習＝地域講座(要援護者も参加させる＝協働研修会)を開催
- ② 災害時・通常時の具体的支援策の策定
- ③ 市社協等が実施する研修会・学習会への参加
- ④ 地域支援者も含めた要援護者支援会議の開催(拡大会議)

- ⑤ 浦添中学校区内の支援ネットワークづくりの推進
 現況としては 10自治会中5割程度が「要援護者支援会議」を開催していない。
 先駆的な港川中学校区に大幅な遅れをとっている。

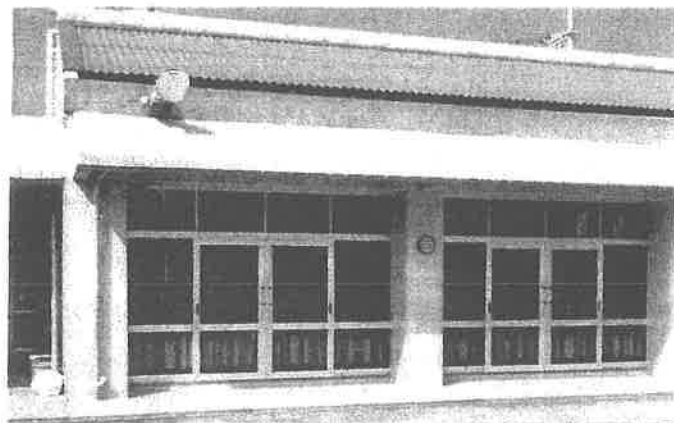
Ⅲ. 終わりに

2年間のてだこ市民大学を間もなく終了しようと、ホッとしているところ。
 これから、市民大学の「理念」「目的」を成し遂げていけるのかどうか今一度考える
 必要がある。学習成果を地域社会や学校教育等に還元することができる「ひと」に
 なれたかどうか(自問自答)?・・・「はい」である。

義務と責任を考えながら、これまでの学びはすべてが満足というものでもないが
 さらなる自己啓発をしながら、「生涯」地域のボランティアを目指していく決心！
 さらに2年間で築いた大きな「財産」も大事にしていく。

事務局をはじめ 市民大学関係者には 衷心より感謝申し上げたい。

浦添グリーンハイツ自治会館



ふれあい農園がついに完成 (2013. 2)



まちづくり委員会で黒木並木を (2012. 3)



* 参考資料

- ・浦添グリーンハイツ自治会(平成24年度)事業・活動計画
- ・浦添市 h/P
- ・浦添市「災害時要援護者避難支援計画」
- ・浦添市民生委員児童委員連絡協議会・第4民児協事業報告書



卒業研究

学部名：健康福祉・スポーツ振興学部

氏 名：松田 ミサ子

1. テーマ

心の病「うつ」を知り大切な命を守る
～誰もがなりうる「うつ」について理解し、関わり繋ぐには～

2. テーマ設定理由

現代社会において、勝ち負けの競争社会の中ストレスのため、脳が疲れ、身心のエネルギーが枯渇する病気が「うつ」である。年齢、性別に関係なく、誰もがなりうる「うつ」について身近な病として捉えた。

3. 項立て（概要でも良い）

はじめに

- 1 「うつ」の現状
- 2 「うつ」と自殺について
- 3 「うつ」のサインと自己チェック
- 4 「うつ」の人との接し方のポイント
- 5 困った時の相談窓口
- 6 今後の展開に向けて
- 7 まとめ
- 8 おわりに
- 9 参考資料

はじめに

うつは心の風邪？とんでもない「うつは心の生活習慣病」だと講話の中でハッキリ言われた某病院の若い医者がいる。皆さんはどう思いますか。十分な睡眠とストレスと上手に付き合うことがこころの健康には欠かせない要素となっている。しかし、それができなければ誰でも「うつ」になるという現実がある。中でもうつ病は、心の病気の代表的なものであり、多くの人がかかる可能性を持つ精神疾患である。

適当なストレスは我々の脳の成長、刺激に大変必要とも言われ、逆に我々の脳は適度なスポーツ（ジョギング、ウォーキング）等を行うことによって、復元も早いように思われます。ただ、ストレスで脳の慢性炎症、すなわちストレスのかかりっ放しが、脳神経細胞（ニューロン）のダメージ損傷となり、記憶が悪い、眠れない、食欲がない、疲れやすい、何もしたくないという形で「うつ」の初期が始まる。

1 うつの現状

私はうつで通院している方々の話を聞く機会が大変多く、また、民生委員児童委員をしているため、障害者（精神）との関わりも多く、うつへの理解は私なりにできていた。福祉課、地域支援課、保健相談センター等へ行き、本市のうつ病についての概要を知るとともに、説明の中、うつにかかった人の4人に3人は医療機関を受診していないという調査報告を知り愕然とした。

うつ病などのこころの病気は有効な治療法が確立しているため、早期診断、早期治療が重要であるにもかかわらず、現実には一部の人しか医療機関及び精神科医の診療を受けておらず、ほとんどのうつの方々が悶々とした生活をしている状況を理解した。ここで大変重要なことは「うつ」病は、「なまけや逃避では起らない」ことは理解してほしい。又、相談や受診に結びつかない最大の原因は、本人及び周囲の人たちの精神疾患への偏見があるように思う。

体の病気の診断は、血液検査など客観的な根拠に基づいて行われるが、うつ病など心の病気は本人の言動、症状などで診断するほかなく、血液検査、画像検査等、客観的な指標、根拠がないため周囲の人たちが病気への理解が進まず、偏見などにつながっている現状がある。私たちの心の健康とは、脳の働きによって左右される。

現在、うつ病等、より客観的な診断を目指した脳の血流量を測る検査の研究など進みつつあるようです。心の病気に伴う様々な言動症状は、脳という臓器の状

いものです。

2 うつと自殺について

この病は、未来を悲観し自殺という「死にたい」願望が強く、うつ病の5%～15%は自殺につながるという調査報告があり、自殺者の45%～70%の人たちに「うつ」病があったとのデータがある。H24年10月10日（木）NHKの朝のラジオニュースで全世界で3億54万人の人々がうつ病を患い、その中でも特に女性のうつ病が多く、自殺した100万人の多くがうつ病で占められている結果がでたとの報道があつた。実に驚く数字です。

日本の自殺は、どの国でも共通にみられる加齢に伴う自殺率の上昇とともに男性においては、50歳代に自殺率のもう一つのピークを形成していることが特徴です。又、浦添市においては、死亡率（人口10万人当たり）が21.6死亡者数の累計（H18～H22）で男女ともに40歳代の働きざかりに自殺が最も多くなっています。

④ / 浦添市における自殺死亡率（人口10万人当たり）の推移

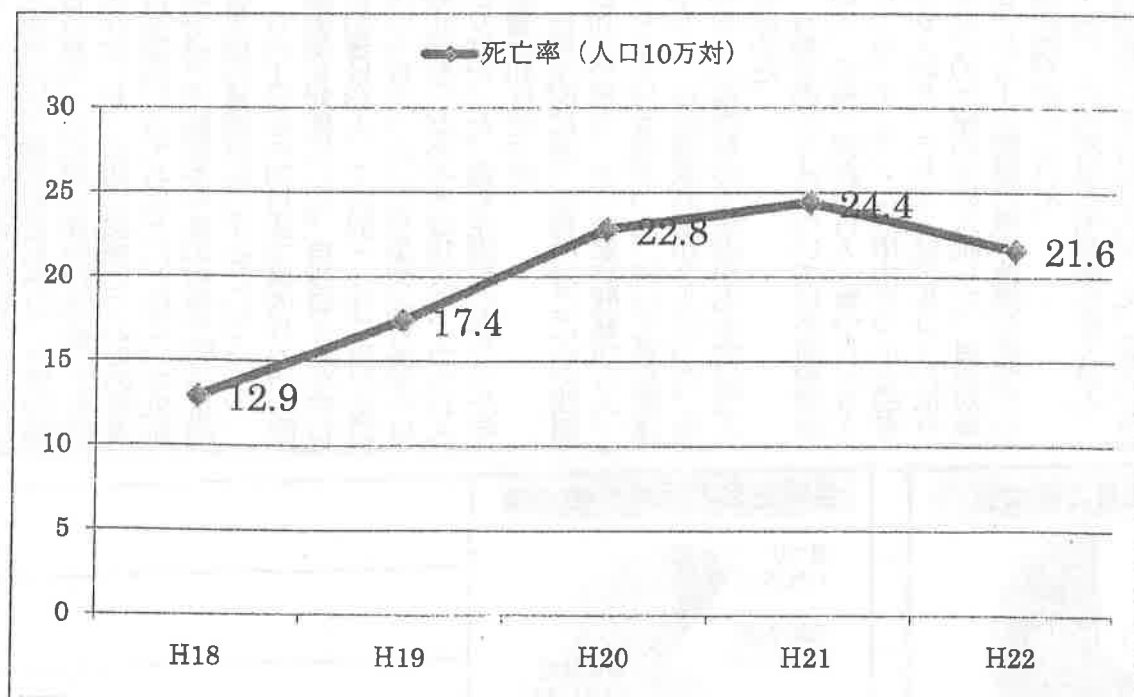
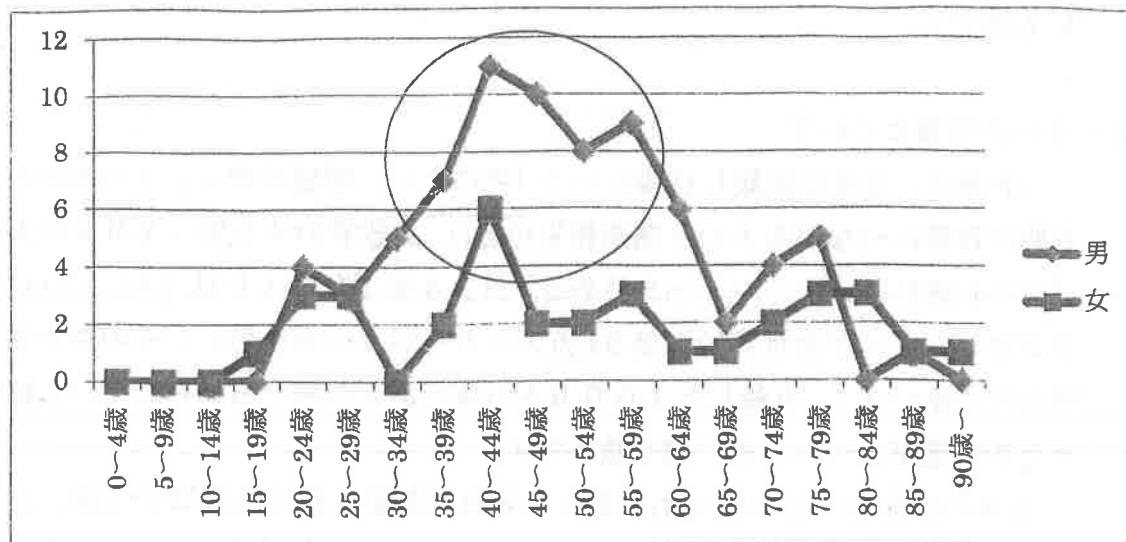


図 2 浦添市における性別年齢区分別自殺者数 (H18～22 年累計) 単位 (人)



(2)3

自殺図る人 6割は女性 県調べ 予防対策活用へ

自殺未遂をしたり自傷行為をしたりする「自殺企図者」は全体の6割が女性で、男性に比べて高いことが県福祉保健部中央保健所の調査で分かった。全国的に自殺者は男性が占める割合が高いことが分かっているが、企図者は女性が多いという県外からの調査報告もあり、今回の調査は県内でも同様の傾向があることを明らかにした。自殺企図者についての発表は全国的にみてもほとんどなく、中央保健所はこの調査を今後の自殺予防や企図者支援の基礎資料とするとしている。

6月1日から30日まで県内9カ所の医療機関を対象にした。自殺者4人を含む企図者は43人。その62・8％に当たる27人が女性だった。自殺未遂を繰り返す「自殺企図歴」がある者は18人で、うち15人が女性だった。最も企図者が多かった年齢層は40代だった。

自殺企図に至った理由はこの問題が10人で最多、次いで家庭問題が8人。うち7人は女性だった。続いて男女問題が5人、体の健康問題が3人だった。精神科・心療内科の受診歴がある者は32人を占めた。

自殺企図の方法については多量服薬が29人、切創・刺創が11人、首つりが5人だった。アルコール飲用中だった企図者が6人おり、うち4人はアルコール依存症などの治療のため入院した。自殺対策とアルコール問題対策の連携を拡充する必要性が挙げられた。

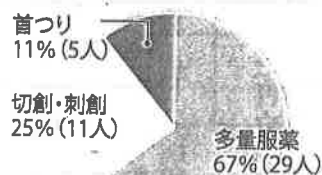
実行した場所は自宅が最も多く34人。同居者がいるのは31人だった。家族や身近な人の見守りが自殺を防ぐとし、自殺企図者を持つ家族への支援や、関係機関との連携の強化を今後の目標としている。

(松王麗香)

自殺企図者の男女比



自殺企図の手段 ※複数回答



本市の自殺死亡率の推移を見るとH21年は県内で13位、H22年は23位と徐々に自殺が減っていることは実によいことと思われるが、全国から見ると沖縄はワースト5位へと悪化している。

私事で恐縮ですが、H9年7月、私の無二の友人が「うつ病」で自殺をしてしまった。病院に入院していたことは知っていたが、症状も良くなり一時退院というその日に帰宅し、その日に命を絶ち旅立ってしまった。正に典型的な退院直後の悲劇でした。あれから15年余の歳月が経ちましたが、私の心に空いた大きな穴は未だに埋める事ができず、思い出しては自分の不甲斐ない思いでいっぱいになる。

また、これも奇遇というか、この卒論のまとめに取りかかっていた最中に一本の電話が入った。「今、急ぐ逢いたい」。内容を聞くと「うつ病」に罹り、入退院を繰り返して悶々と過ごし、朝になると死ぬことだけしか考えられず、家族がいても何の役にもならなかった等、自分の気持ちを一気に吐露した。偶然とはいえ、私は言葉を失うほどショックだったが、現在は近くのデイケアにも参加し、毎日が楽しいということを知り、自分のことのように嬉しいかぎりである。又、近いうちに会う約束もした。

3 うつのサイン、自己チェック

(51-4)



気をつけよう、うつのこんなサイン

からだの症状

- ① 不眠
- ② 食欲低下
- ③ 疲労感・倦怠感
- ④ 首・肩のコリ
- ⑤ 頭痛・めまい



こころの症状

- ① 元気が出ない
- ② 悲しい、憂うつ、
気分が沈む
- ③ 好きな事もやりたくない
- ④ 物事を悪い方向へ考える
- ⑤ 決断が下せない
- ⑥ 仕事能率の低下

6 今後の展開に向けて

私は以前より、統合失調症、うつの方々との関わりの中、常々考えているが中本先生（沖縄県総合精神保健福祉センター長）がやっておられる認知行動療法（LBT）を用いたセルフケアを本市の保健相談センターでもやれないものか、もしそれができるのであれば私もその中で、何かの形で関わりたい。例えば私の趣味でもある小物の手作り等を教え、自分たちで作る喜び、達成感等、少しでも共有できるのではないかと考えている。暗中模索ではあるが、そういう人たちと関わりながら寄り添って繋がっていききたい。

7 まとめ

最後になりましたが、私は民生委員児童委員をしながら、浦添市内のNPO法人ホットハウス（浦添市精神障がい地域支援センター）に関わり16年目を迎えます。

市民との懸け橋として私達を是非活用して下さい。1人で悩まないで考え込まずに相談して下さい。

これからは経済の貧困等、生活様式も色々と変化し、人間関係もますます複雑な傾向になっていく様に思います。

また、本市への要望として病院で心の相談が安易にできる様、もっと力を入れて増やしてほしいと思います。なぜなら育児不安や小児の成長発達上の相談、親子の心のケア等を行うほか、近年増加する児童虐待や学校でのいじめ、気になる子どもたち、発達障害を始め様々な子どもの心の問題への対応を行う必要がある。そのため、小児科医や児童精神を学んだ医師の割合が増加することによって、子どもの心身の問題への対応が充実することが期待されます。

予約がなければ・・・紹介状がなければとたらいまわしのような現状も是非理解して下さい。

平成24年11月6日、タイムス紙掲載「勝ち負けの競争社会の中、生きにくい人も多いと思う。目線を広げ人の生き方や関わり方を一緒に考えたい。」という社説に私も同感です。

8 おわりに

二カ年間、てだこ市民大学生として64歳の私が貴重な体験、経験をさせていただきました講師の皆さま、事務局の皆さま、市民大学の総てに関わっていただいた皆さま、厚くお礼を申し上げます。特に玉城学部長にはアドバイス等を受け、書き

重いテーマでしたが、今後のライフワークとして地域に根差し頑張っていこうと思います。有意義な二カ年でした。ありがとうございました。

9 参考資料

- ・ 講座資料（仲本晴男先生）沖縄県総合精神保健福祉センター長
- ・ 健康日本 21（第二次）の推進に関する参考資料
- ・ 保健所活動概況（沖縄県中央保健所）



てだこ市民大学

卒業研究

学部名：文化振興・教養学部

氏名：金城 香代子

1. テーマ

「暮らしの中の沖縄のカタチ ―暮らしの中からつなぐ“沖縄らしさ”―」

2. テーマ設定理由

沖縄にある工芸品を地元・沖縄の人たちにもっと知ってもらいたい、ぜひ普段の生活に取り入れてもらいたいと考えた。

沖縄の工芸品は「お土産品」など特別なモノとして見られることが多い。普段の暮らしをイメージする「空間」を設け、工芸品で構成して見せることで、「特別なモノ」から「生活で使うモノ」としてのイメージを見せることができるのではないかな。

また、現在の生活スタイルの中でも「利用しやすい形」、「利用したくなる形」を考えることで、より身近なモノ、身近に置きたいモノという見方を持ってもらえるのではないかな。

現在の暮らしの中に工芸品を取り入れることで、薄れつつある「沖縄らしさ」を伝えることもできるのではないかな。工芸品の形や手触り、醸し出される空気を体感してもらい、沖縄の人たちに沖縄のモノの魅力を感じてもらおうきっかけになればと考え、テーマを設定した。

3. 項立て（概要でも良い）

1. テーマ設定理由

2. 研究内容

- (1) 沖縄の工芸品についての考え
- (2) 「第10回沖縄市工芸フェア」での実践
- (3) 「第10回沖縄市工芸フェア」での成果と課題

3. 浦添市への提案

- (1) 一つの事例（給食会での様子―仲西小学校にて）
- (2) 給食会の漆器体験から

4. おわりに

「暮らしの中の沖縄のカタチ ―暮らしの中からつなぐ“沖縄らしさ”―」

学部名：文化振興・教養学部

氏 名： 金城 香代子

1. テーマ設定理由

沖縄にある工芸品を地元・沖縄の人たちにもっと知ってもらいたい、ぜひ普段の生活に取り入れてもらいたいと考えた。

沖縄の工芸品は、先人たちが行ってきた国際交流の中から形作られ、風土と人の手で大切に育まれてきた「沖縄らしさ」を表した形であるといえる。

沖縄の工芸品は「お土産品」など特別なモノとして見られることが多い。店舗でよく目にするような陳列棚に並ぶモノとしてではなく、普段の暮らしをイメージする「空間」を設け、工芸品で構成して見せることで、「特別なモノ」から「生活で使うモノ」としてのイメージを見せることができるのではないかな。

また、現在の生活スタイルの中でも「利用しやすい形」、「利用したくなる形」を考えると、より身近なモノ、身近に置きたいモノという見方を持ってもらえるのではないかな。

現在の暮らしの中に工芸品を取り入れることで、薄れつつある「沖縄らしさ」を伝え、未来へつなげることもできるのではないかな。工芸品の形や手触り、醸し出される空気を体感してもらい、沖縄の人たちに沖縄のモノの魅力を感じてもらおうきっかけになればと考え、テーマを設定した。

2. 研究内容

(1) 沖縄の工芸品についての考え

県内各地の特色ある織物、紅型などの染色品、漆器、やちむん（陶器）、ガラス、木工や竹細工など、沖縄には長い歴史と風土に育まれた数多くの工芸品がある。

「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）」で定められた「伝統的工芸品」として国の指定を受けている沖縄の工芸品は 14 品目。全国で 212 品目あり、最も多く指定を受けている京都府（15 品目）に次いで 2 番目に多い。

<沖縄の伝統的工芸品一覧>

- ① 織物 … 久米島紬、宮古上布、読谷山花織、読谷山ミンサー、琉球絣、首里織、与那国織、喜如嘉の芭蕉布、知花花織、八重山ミンサー、八重山上布 (11)
- ② 染色品 … 琉球びんがた (1)
- ③ 陶磁器 … 壺屋焼 (1)
- ④ 漆器 … 琉球漆器 (1)

沖縄の工芸文化は、14～15世紀頃の海外貿易時代に琉球の人たちが行ってきた交易が基盤となって形成されており、南方系、中国系、日本系、朝鮮系など多種多様な技術技法が生かされている。これらの海外から伝来した技術技法は、沖縄の気候風土に育まれながら、人々の暮らしに生かされ、地域性と固有性に優れた工芸文化として発展してきた。しかし、琉球処分や戦争を経験し、琉球王朝時代に生産された多くの工芸品は消失。長い歳月の中で育まれた技術技法も一度は途絶えたが、戦後、多くの技術者たちの多大な努力で復興を遂げたものが多くある。新しい工芸品としてガラスや木工なども誕生している。

沖縄の工芸品は、先人たちが行ってきた国際交流の中から形作られ、風土と人の手で大切に育まれてきた「沖縄らしさ」を表した形であるといえる。

しかし、現在の私たちの生活の中で工芸品といえば、お土産品や記念品という「特別なモノ」というイメージを抱いている人が多い。アメリカや県外、海外からもたらされた安価で大量生産されたものが手に入りやすくなったことや、生活スタイルの変化も大きな要因であると考えられる。

(2) 「第10回沖縄市工芸フェア」での実践

「暮らしの中の沖縄のカタチ」と題して工芸品を用いた空間の提案を行った。

① 実施までの経緯

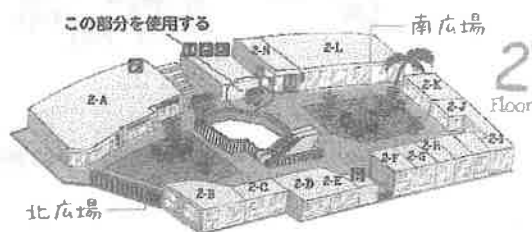
「第10回 沖縄市工芸フェア」(平成24年3月15日(木)～18日(日)開催)の開催に際し、実行委員の皆さんより「10周年を記念に何かできないか」と相談を受け、会場内に空間提案コーナーを設けることを提案。暮らしをイメージする空間の中で工芸品を見せることで、お土産品や記念品といった「特別なモノ」から、現在の生活のシーンの中でも利用したくなるようなイメージを与えることができるのではないかと考えた。

② 「暮らしの中の沖縄のカタチ」ブースの設定

会場となるプラザハウスフェアモール2階のエレベーター前のスペースを利用し、縦3.2m×横7.2m×高さ3.6mの場を設置。その中に「洋の空間、和の空間」を構成することになった。



プラザハウス外観



2階フロア見取り図

③ 10種類 12工房の工芸品の利用

空間構成に使用する工芸品は、沖縄市工芸産業振興会の皆さんの協力によるもの。

※工芸の種類と協力工房

織物(知花花織事業協同組合)、陶器(親川陶芸「唐白窯」、なかどまり工房、榮一工房)、

びんがた（宏次染工房）、琉球ガラス（Glass Studio 尋）、竹細工（北谷竹細工）、木工（木工房 島変木）、漆器（P e - V e）、シーサー（ギャラリー嬉楽）、革製品（うちな〜工芸）、オーディオ（知名御多出横）

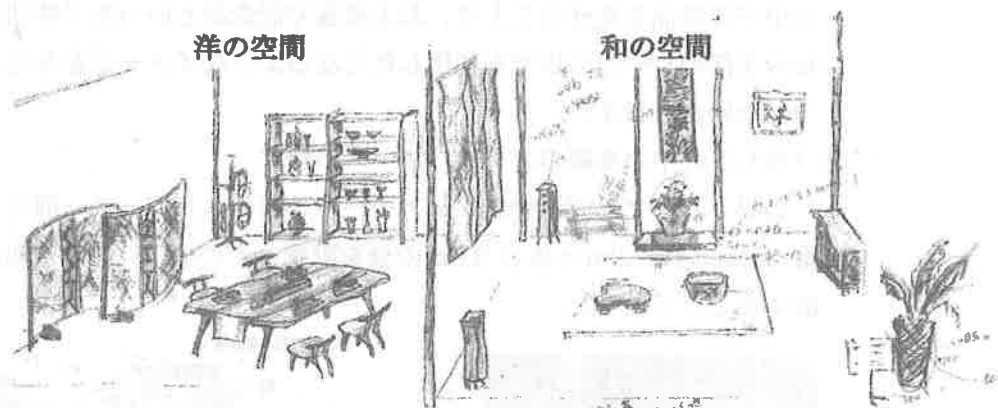


工芸作家の皆さん

③新しい形を求めて

協力工房には、空間構成のイメージに合ったものを新たに制作してもらった。開催時期が3月ということもあり、空間構成のキーワードを「春」に設定。イメージカラーとして、淡いトーンのピンクやブルー、グリーンなどを設定した。

あらかじめ、空間のイメージ図を作成。全体会合の際に、それを見てもらいながら、それぞれにどんなモノを作ってほしいかを大まかに説明。後日、個別に訪問し、詳細を説明しながら具体的な打ち合わせを行っていった。

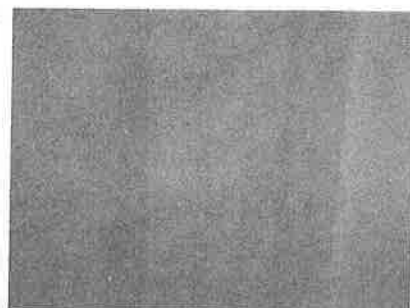
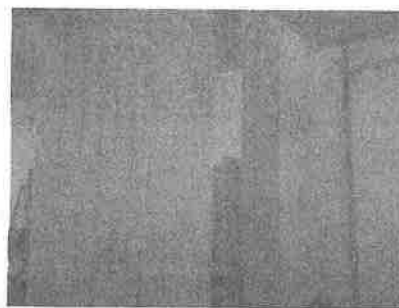


<「暮らしの中の沖縄のカタチ」ブース イメージ図>



＜「暮らしの中の沖縄のカタチ」ブース 実際＞

織物：洋の空間と和の空間の間をゆるやかに仕切るものとしたため、5枚の知花
花織を織ってもらい、のれんのように並べて吊るす。広い面積でも空間に圧
迫感を与えないものにするため、少しの風にも揺れるような軽やかな印象の
ものにする。これまでの知花花織には見られない“透け感”のあるものを織
ってもらうよう依頼。



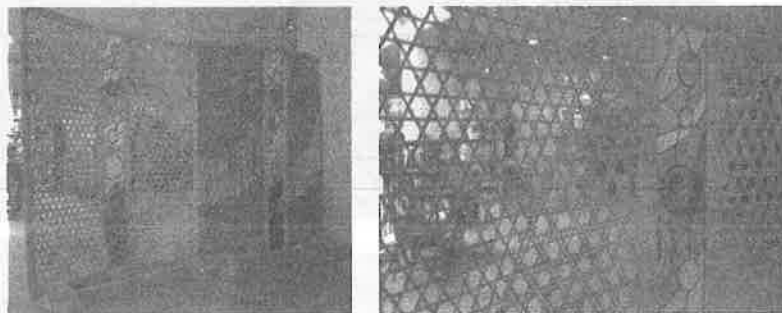
薄く透けるような感覚の知花花織。1枚ずつ異なる染料で染められ、柄・模
様も異なる。

通常の知花花織



竹細工と琉球ガラス：両者を組み合わせたパーテーションを考案。

竹細工と琉球ガラスの職人ともに、共同で一つのモノを制作するのは初めて。竹編みの2面の中心に琉球ガラスのステンドグラスを組み合わせたパーテーションを2組制作した。竹の編み方を途中で変える試みも行った。



④工芸品をより生かす工夫

現在の生活のシーンの中でも利用しやすい、利用したくなるような「形」を検討。

ア. びんがた

一般的に着物や風呂敷として多く用いられているが、床の間にかける掛け軸調にアレンジ。壁にかけるタペストリーとしても使用でき、額装を施してアートとしても応用が可能。

イ. 陶器

「やちむん」から連想されるマカイや抱瓶などの形ではなく、洋風のテーブルコーディネートにも利用できる脚付小皿や花器、和の空間では大型の火鉢や大型の花器を制作。

ウ. 竹細工

民具としてあるバーキやサギジョーキなどの形を発展させて照明器具などを制作。

エ. 漆器

半月盆を制作。通常の半月盆は、縁に耳の立ち上がりがついたものが多く、トレイとしての利用に限られている印象が強いが、耳の立ち上りをなくし、大皿としての利用も可能にした。テーブルに置いたとき、持ち運びのときサイドに指が入りやすくするため、底部分の縁には1 cmの角度をつけた。



びんがたの掛け軸風と火鉢



漆器の半月盆と脚付小皿など

(3)「第10回沖縄市工芸フェア」での成果と課題

①成果

多くの人が訪れるイベント会場で工芸品を用いた空間をつくる試みや、全体のイメージを統一してモノを作ってもらえるよう、作り手の皆さんと話し合いながら実現に向けて取り組んだことは初めてのことであった。

開催期間中は会場に常駐し、来場者の反応を見聞きしながら、作り手の皆さんの感想や意見も聞いた。

ア. イベント全体

「沖縄市工芸フェア」には2012年3月15日～18日までの4日間で、約2万5000人が訪れた。10周年記念事業の空間提案コーナーにも多くの人が訪れ、展示しているモノに興味を持ち、制作した人たちの展示販売場所でそれぞれ購入していった。入場者数は昨年をさほど変わらなかったようだが、出展者全体の売り上げは2割ほど伸びた。

イ. 記念来場者の反応

「コーディネートされているのを見て、新しい魅力の発見につながった」「使い方の想像がふくらんだ」「懐かしい気持ちになった」「沖縄の工芸品をもっと使いたくなった」などの声があった。

ウ. 作り手の皆さん（まとめ）

普段は、自ら自由にものづくりをしていることが主のため、与えられたテーマや空間のイメージに合わせて、モノを作ることはほとんど機会がなかった。新たに試みた技法や、初めて取り組んだ形や大きさ、異種工芸を組み合わせ、共同で一つのモノをつくるなど、挑戦でもあり、新鮮な体験であった。今後のものづくりの大きな刺激になった。

②課題

さまざまな工房の作り手に協力してもらい、空間構成を行ったが、普段はそれぞれで自由にものづくりをしている人たちが多いため、あらかじめ設定したイメージを伝え、実際の形にしてもらうまでが困難だった。

新たな挑戦となった人たちにとっては、制作過程で失敗があったり、思うような形にできず制作が一旦停止してしまう人もいた。取り組み始めたのが開催5カ月前だったので、当初は十分な時間のゆとりがあるようで安心していましたが、実際は、すべて開催日直前の完成となってしまった。手直しの必要なモノもあったり、イメージとは違った仕上がりになっていたりなど、すべてがイメージ通りの完成品ではなかったことが悔やまれるところ。うまくイメージを伝えられる工夫をすることや、それぞれの工法のことをもっとよく知った上で、作り手と一緒に新しい形を検討することが大切だと感じた。

今回は、「洋の空間、和の空間」として、ダイニングテーブルを置いた洋の空間、畳を置いて酒卓と火鉢を置き、簡易的な床の間をしつらえた和の空間で構成したが、それ以外のさまざまな生活シーンを想定して、どうすればすべてのシーンで沖縄の工芸品を取り入れることができるかを検討していかなければならないと感じた。

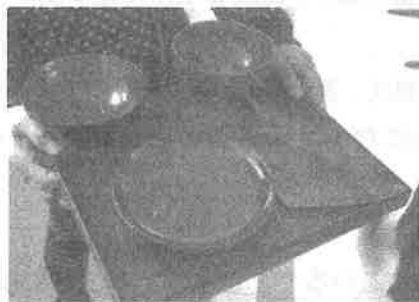
3. 浦添市への提案

浦添市には、工芸に特化した催しなどが無く、市民が目にしたたり触れたりする機会も少ないため、工芸とのつながりは希薄な印象がある。しかし、日本唯一の漆芸専門美術館があり、美術館では漆に関連する体験教室が継続して行われており、参加者から人気を集めている。

(1) 1つの事例 (給食会での様子—仲西小学校にて)

年に一度、市長が市内の小学校を訪れ、児童らと共に給食をとる機会がある。そこでは、特別に琉球漆器の器が使用されると聞き、現場に伺った。

浦添市立給食センターには、琉球漆器の給食用食器セットが100膳分用意されており、給食会当日、市長が訪問する学級では漆器の食器で給食を食べることになっている。



トレーと飯椀、汁椀、小皿が1人分のセットになっている。

前日に児童たちは栄養士さんより、漆器の歴史や取り扱いについての説明を受けていた。

ア. 子どもたちの反応 (仲西小学校6年2組 40人)

琉球漆器で食事することは全員が初めてのこと。

「高価なものと聞いたので、いつもより大事に扱う (扱いに気を遣う)」

「食べるときも緊張する」「いつもより高級なものを食べている感じがする」

「また使いたい」(3人/10人中)「使いたくない」(6人/10人中)



イ. 調理担当者のコメント

いつもとは違う食器を使うことだけで、子どもたちにはとても強い印象が残ったようだ。普段のプラスチック製の食器よりも、温かみがある。調理側としては、洗浄する際、一つずつ丁寧に手洗いすることになるため、手間がかかり、保存にも配慮することが多いが、子どもたちにとっては、(漆器の

食器での給食は) 良いことだと思う。1学級分しか用意できず、6年生全員に使わせることができないのが残念なところ。

ウ. 栄養士(定歳尚子先生)のコメント

前日に漆器の歴史や特徴を簡単に話したが、価値は伝わっていなかったようだ。一つずつの値段を話すととても驚いていた。琉球漆器を使って食べることはわずか1日だけの体験だったが、沖縄に漆器という工芸品があることを伝えることができ、普段とは違う緊張感を持ちながら食べた給食は、小学校の思い出になってくれたと思う。学年全員に使用体験させることができなかったことが残念。また、市内のすべての小学校の子どもたちが体験できることでもないで、その点も残念だ。普段の生活の中で沖縄の料理を食べることが大切のように、沖縄のものを使うことも大事。郷土に対する意識が高まってくると思う。

(2) 給食会の漆器体験から

子どものころに工芸品に触れることは、非常に大切な体験であると考えている。工芸品を通して、歴史や自然、民俗、文化に触れるきっかけにすることができるからだ。給食会で漆器を使用することができた子どもたちは、漆器の歴史に触れ、価値や扱い方などを知ることができた。こうした少しのきっかけから興味を持ち、さらに深めていきたいと考える子どもが出てくるかもしれない。実際の生活の中にも取り入れるきっかけにつながるかもしれない。飛躍するが、彼らが県外や海外に出たとき、自信を持って薦められる地元の逸品を一つ知っているということは、彼らにとって非常に誇りとなるものだ。

浦添市内のすべての子どもたちが漆器を使って食事をする体験ができないかと感じた。例えば、小学校の卒業が間近に迫る時期に、6年生全員が漆器で給食を食べる機会が、市内の小学校で持ち回りで行われるなど。市立給食センターでは漆器の給食用食器セットが100膳あるそうだが、1学年分の給食用漆器セットを用意し、小学校の記念行事の一つに組み込んではどうかと思った。

4. おわりに

てだこ市民大学の2年間で浦添市のことをよく知ることができ、愛着につながった。歴史や文化を知ること、「伝えていく」ことの大切さをより深く考えるようになった。

今、伝えなければ消えてしまいそうなものが、私たちの身の回りにはとても多くあるように思う。工芸品をつくる技術、それらの素材となる自然、沖縄の心を伝える言葉、地域の人たちが守り続けるまつりや風習など。「沖縄らしさ」とは何か、具体的に説明することはとても難しいが、沖縄の人が「沖縄らしさ」を伝え続けていかない限り、沖縄は沖縄でなくなってしまう危険性もあるのではないかとさえ感じる。

普段の暮らしの中で意識しながら心がけていくことが「伝えていくこと」につながるのではないかと考える。今後も、暮らしの中から「沖縄らしさ」を伝える提案や活動を行っていきたい。

卒業研究

学部名：文化振興・教養 学部

氏 名：伊芸幸恵、伊禮昭、伊禮さやか、上原常子、崎原和枝
志賀マサ子、島明美、島袋洋一、新城英子、新城かつ子
瑞慶覧香代子、知念賢世

1. テーマ (制作・出演協力) 金城香代子、島元智、池原りえ子、城間京子

うらそえの文化を伝えよう

2. テーマ設定理由

首里以前の琉球王国（中山）の都は浦添であったとされ、市内の随所にその名残を認めることができるのは市民の誇りとするところである。

浦添グスクに代表される有形の文化遺産はそれほど懸念することなく保存・継承されていくことと思われるが、獅子舞に代表される伝統芸能などの無形の文化遺産の現状はどのようなものであろうか。われわれの祖先が大事に伝承してきた文化には、地域を結ぶ知恵があり、確実に次世代へ伝えていかなければならないものであるが、その現状を知ることによって継承のヒントを知り得るのではないだろうか。

さらに、浦添に伝わる昔話を「方言劇」と「紙芝居」にリメイクして作品を作り、「うらそえの文化」をウチナーグチにより伝える試みとして、文化振興学部全員で取り組むこととしたものである。

3. 項立て (概 要)

I テーマ設定理由

II 本 論

1 浦添の民俗芸能について

- (1) 勢理客の獅子舞
- (2) 西原の大綱引き
- (3) 小湾のアギバーリー

2 浦添に伝わる伝統的年中行事について

3 浦添に伝わる昔話、民話について

- (1) 日本の昔話
- (2) 沖縄の昔話
- (3) 浦添の昔話

4 文化振興・教養学部としての試作・実践について

- (1) 方言劇「モーイ親方」の脚本作成と実践について
- (2) 紙芝居「母の木」作成と実践について

III 成果と課題

IV おわりに

- ※ 資 料
- ※ 参考文献

テーマ 「うらそえの文化を伝えよう」

文化振興・教養学部 2 年次

伊芸幸恵、伊禮昭、伊禮さやか、上原常子、崎原和枝、志賀マサ子、島明美、島袋洋一、新城英子、新城かつ子、瑞慶覧香代子、知念賢世、(制作・出演協力) 金城香代子、島元智、池原りえ子、城間京子

I テーマ設定理由

首里以前の琉球王国(中山)の都は浦添であったとされ、市内の随所にその名残を認めることができるのは市民の誇りとするところである。

浦添グスクに代表される有形の文化遺跡はそれほど懸念することなく保存・継承されていくことと思われるが、獅子舞に代表される伝統芸能などの無形の文化遺産の現状はどのようなものであろうか。われわれの祖先が大事に伝承してきた文化には、地域を結ぶ知恵があり、確実に次世代へ伝えていかなければならないものであるが、その現状を知ることによって継承のヒントを知り得るのではないだろうか。

さらに、浦添に伝わる昔話を「方言劇」と「紙芝居」にリメイクして作品を作り、「うらそえの文化」をウチナーグチにより伝える試みとして、文化振興学部全員で取り組むこととしたものである。

また、具体的なテーマ設定理由として次のようなことを掲げたところである。

- (1) ふるさとに伝わる昔話や民話を、紙芝居や演劇としての語りや演じることを通して、祖先の住んでいた頃のふるさとを思い描こう。
- (2) 村まつりで見物し、参加して楽しんだ伝統芸能が地域を結びつける力になっていることを見つめなおそう。
- (3) ふるさとの方言は、ふるさとの文化を理解する上で重要であるが、日常生活から方言は消えかけ、若者や子どもたちには理解しにくいものになっている。

このため、紙芝居や演劇の中で段階的に方言を採り入れる工夫をし、方言に慣れ親しんでもらうことも大切にしたい。

II 本 論

1. 浦添の民俗芸能について

浦添市の伝統芸能は、かつて浦添が豊かな農村であったことを思い出させる。西原、前田、城間の綱引き、内間、勢理客、仲西の獅子舞(十五夜祭)など、豊かに実った米を収穫し、神酒を作り、フチャギを作って集落の守り神に供え、収穫後の稲わらで綱を引き、厄除けの獅子舞を奉納するという農村の民俗がある。今や、人口11万以上の大都市に飛躍した浦添市が、かつては農村であったという名残をとどめた伝統行事や芸能は、浦添市民の文化遺産として後世に継承していったほしいものである。

(1) 勢理客の獅子舞

(昭和48年「記録作成等の保存措置を講ずべき国の無形文化財」選択
昭和56年には浦添市の無形文化財指定)

『沖縄民俗辞典』によると、「獅子舞は、沖縄各地で行われている旧4月のアブシバレー、旧6月～8月の盆や豊年祭に演じられる芸能の一種。沖縄からみると中国由来の芸能にみえるが、中国では獅子の語源は古代ペルシャ語のシーアないしシンハに由来するとされる。そもそも中国にはライオンは棲息していなかったため、獅子は想像上の動物である。獅子頭は

梯梧の木を材料とし、胴体は棕櫚縄で編んだものがほとんどで、グロテスクな黒色の獣面が多い。各地では獅子舞によって邪気を払い、地域の繁栄を招来させようとし、五穀豊穡を願ってきた」とされている。

『沖縄芸能史概論』（大城學著）によれば、「獅子舞は芭蕉や芋麻で編んだぬいぐるみの胴に、前足、後ろ足の二人が入る。舞うときには、囃す者（ワクヤー）が登場し、銅鑼、太鼓、ホラ貝、三線の拍子で獅子を誘い出し、舞台上でさまざまな演技をみせる。」としている。

『浦添市史』及び勢理客獅子舞保存会によると、勢理客の獅子舞は、毎年旧暦8月15日の夜、十五夜祭に部落の息災を祈願する芸能として演じられている。十五夜祭の最初に獅子を舞台中央奥に安置し、男達全員が舞台に正座し、「獅子御願」が行われる。御願は、獅子にお酒を供え、若者頭が祈願した後、全員で祈願し、その後、供えられた酒を全員にまわして終了する。その後、祭りの演技が行われるが、初めに保育園児による「シーシーカンカン」が踊られ、伝統芸能の担い手をお披露目する。全演目が終了すると、最初と同様、「獅子御願」を行って祭りを終える。その時、地謡は、バックで「別れ御前風」を演奏するとのことである。

獅子舞の由来については、4百年位昔に「コーレー（高麗か）具志堅」が伝えたとの伝承がある。

勢理客の獅子舞の特徴は、豊富な芸種にこまやかな芸、それに古い型をきちんと継承保存していること、大きく踏み込む足運びの特異さにあると言われているが、昭和48年に「記録作成等の保存措置を講ずべき国の無形文化財」として選択され、更に、昭和56年には浦添市の無形文化財に指定されており、現在、勢理客獅子舞保存会によって継承保存されている。

獅子舞の芸種は11芸あり、儀式的な「ジャンマー」と遊び的な「モーヤー」に区分され、異なった三味線の旋律で演じられ、太鼓、ドラ鐘の打物が添えられている。なお、獅子は雌で、額に「王」の文字が書かれている。

平成24年は10月7日に行われ、勢理客獅子舞保存会の努力が感じられる舞台であった。「長者の大主」や素朴で古色あふれる舞など、十五夜祭そのものが伝統芸能として保存されるべきものと思われた。区民も多数参加し盛大であった。保存会の関係者は、「若者が参加しやすいように、若者の意見を取り入れてプログラミングしている。保育園児も参加する子ども獅子（シーシーカンカン）などを採り入れて、早期から伝統芸能に触れさせて育成に力を入れているが、大人になって獅子舞を演ずる保証はなく、獅子舞保存者の継承に頭を悩ませている」とのことであった。

（2）西原の大綱引き

戦前の習わしでは、旧暦6月25日に綱引きをしていたが、現在は綱を購入しているため、旧暦6月25日の翌週あるいは翌々週の日曜日に行われている。平成24年は、相次ぐ台風のため、10月2日に行われた。

西原の綱引きの由来は、約350年前に遡ると言われている。昭和62年からエイサー、盆踊りなどと併せて西原一区、二区合同の「西原まつり」として実施されている。大綱引きの特徴（見所）は
イ．勇壮な綱巻き（チナマチ）

ロ. 叩き綱（タタキヅナ）・・・綱を上下にゆすり、地面に叩きつけながら引く

① 大綱について

雄綱・雌綱（各約30メートル）を貫木棒（カヌチボウ）で連結する。
綱は、南風原町宮城区自治会で使用したものを購入している。

戦前の西原区は、のどかな田園風景が広がり、稲作農家が多く、浦添で一番の納税地区であった。各家庭で藁を保管し、毎年旧6月には藁を持ち寄り、区民総出で綱づくりが行われた。綱の長さ現在の約2倍で、かなりの太さであった。それも戦後4、5年までは続けられたが、稲作からキビ作への転作により藁の確保が難しくなった。

② 東西の組み分け及び旗頭

西原一区自治会（東）、西原二区自治会（西）に分かれて綱を引く。

一区（東村渠<アガリンドカリ>）・・・雄綱・旗頭「豊年」
飾り「梅花（牡丹）」
二区（西村渠<イリンドカリ>）・・・雌綱・旗頭「躍進」
飾り「桜花」

※ 子ども用の旗頭を別途制作し、「結」の一文字が描かれている。

③ 綱引き

一区は、「アガリヌモウ（東の毛）」、二区は「メーヌモウ（前の毛）」でそれぞれ支度を整え、大綱を担いで綱引き会場に入場し（「チナアギ（綱上げ）」）、カヌチボウから少し離れたところで停止して双方対峙する。

※他の地域で行う護佐丸や阿摩和利等に扮し、対峙する「支度」と同じ意味合い。

その後、双方綱を担ぎ上げてカヌチボウ付近まで進んだ後、会場を一周してカヌチボウまで再び進んで綱引き態勢を作る。（「チナマチ（綱巻き）」）雄綱、雌綱を合わせ、カヌチボウを差し込んで直ちに綱引きの開始となる。

ちなみに平成24年は、2回とも一区（東村渠）が勝利し、豊作になるとのこと。

④ 神事

綱引き関連の神事は、綱引きの前々日の夕方、両自治会長、役員、地域の人々など10人前後で行われる。

・ 拝みの場所

- イ. 7か所の門中元家（棚原、ミーヤ、大城、川端、石川、又吉、天願）
- ロ. フートゥーヤー
- ハ. アガリガー（東井泉）
- ニ. ウガンヤマ（拝み山）
- ホ. 普天間宮

※供物として、ウンサク（醗酵酒）と果物、餅（ウチャヌク3組）

（3）小湾のアギバーリー

（アギバーリーとは・・・会場で行うハーリーに対し、アギ（陸上の意）で行う模擬ハーリーの事をいう）

小湾のアギバーリーは、大正4年（1915年）に大正天皇即位祝賀会行事として始まった。那覇市泊の「地バーリー」を基に、海辺の集落であった小湾

に伝えられ、創意工夫を加えて小湾独自の行事として伝承されてきた。「船漕ぎの所作」と「船から降りて渦巻状に回るグーヤーマチの所作」の二部構成になっているのが特徴である。

一時、途絶えた時期もあったが、昭和50年(1975年)に復活し、昭和53年(1978年)のてだこ祭りで披露された。市文化祭、皇太子行啓時の披露、国立劇場公開等も行われた。平成19年(2007年)から「祈願アギバーリー」として、集落内を道ジュネーするようになり、最近は新年行事として毎年1月3日に開催されている。平成14年に「アギバーリー保存会」を結成して保存に努めている。

米軍基地に接収された旧小湾集落からの移住60周年を記念して、平成22年(2010年)には旗頭が作られ、伝統芸能の「小湾オオージメ」なども披露された。小湾集落は、浦添市西南部牧港補給地区内に位置し、西洲、勢理客と隣接していた。当地にあった集落は、戦後、軍用地(キャンプキンザー)として土地を接収され、それまでの小湾の住民は宮城に移住した。そのため、現在は移住先のある宮城に小湾自治会がおかれ、宮城の一部が小湾地区になっている。

今年、平成25年(2012年)1月3日には、住民の健康や幸福、繁栄を願う行事として、宮城小湾自治会館周辺で開催された。小湾自治会員らが、どらや掛け声、歌声を響かせながら、ハーリー舟をかたどった山車を引いて部落内を「道ジュネー」し、無病息災や東日本大震災からの復興を願った。参加者全員が、小湾お宮で祈願をした後、こぎ手やかね打ち、旗振りらに分かれて山車に乗り込み、うたや太鼓、掛け声に合わせて、櫓をこぐ勇壮な姿を見せながら引き歩いた。当日はあいにくの雨で「道ジュネー」も大幅に短縮して行われた。小湾自治会関係者は、「アギバーリー」の演技には、鉦うち、こぎ手、太鼓、竜頭、竜尾などの役割があり、総勢45名の人数を要しているため、参加者をそろえるのが大変だとしている。大正時代に始められた新しい芸能であるが、約100年も続いているのは立派である。

2. 浦添に伝わる伝統的年中行事について

浦添は、首里、那覇に隣接しているという地域的特性が、伝統行事や民族芸能に色濃く残っているとされ、また、純農村地域であったことから農事に関連した諸行事、芸能が盛んに行われているとされているが、浦添に伝わる伝統的な年中行事(行事食を含む)は次のとおりである。

旧暦1月 ・正月行事(若水汲み<1日>、初起こし<3日>)・・・初御願

朝一番に村の産ガで若水を汲み、若水で水撫でをし、お茶を沸かして仏前に供える。重箱に赤白黄の紙を重ねて敷き花米を盛り、炭、昆布、みかんをのせ仏壇や床に飾る。元旦は、白米、豚肉汁、カティムン(豚肉、大根、ごぼうの煮しめ、昆布巻き、かまぼこ、天ぷらなどの盛り合わせ)が定番の正月料理で、なます、ナットウ、糕菓子をつくることもある。

・三日節句(ミツヤヌク) 沢岬や前田では豚肉入りの雑炊や野菜炒めを食べる。

・七日節句(ナナカヌク) 田芋入り雑炊を食べる。

・ジュウルクニチー(16日)

新仏のある家は、重箱を作り墓参りをする。重箱は、餅と乾肴(カシヤカ)

- を対にして供える。餅の重は、丸餅を15～18個を3列に詰める。乾肴は正月料理を重箱詰にしたもので、行事食の典型である。餅と乾肴の重箱を二組供える。そうでない家は、簡単な食事を仏前に供える。
- ・二十日正月・・・(正月行事祝いおさめのご馳走) <ジュリ馬>
 - 2月 ・ニングアチヒガン (二月彼岸) 料理は、16日祭のお重と同じ。
 - 3月 ・サングアチャー (三月・浜下り)・・・女の節句、赤飯・重箱
 - 4月 ・清明祭 (ウシーミー) 18世紀前期、久米村で始められた。
彼岸と同様、お重を作り門中、家の墓に供え、親族がそろって直会をする。
 - ・アブシバレー・・・田畑の害虫駆除と豊作祈願
 - ・クスックウィー (腰憩い) 農民の骨休め行事、相撲、牛合わせ等
 - ・ハルヤマスーブ (畑山勝負)
(村の事業・・・農業・畜産奨励・・・現在の農業祭・・・芸能披露も)
 - 5月 ・ユッカヌヒー (4日)・・・子どもの祭り、おもちゃをあげる習慣
 - ・グングアチウマチー (5月ウマチー (節日) <15日>)
(稲穂の豊作祈願祭り)
 - 6月 ・ルクグアチウマチー (6月ウマチー (節日) 稲穂の収穫祈願祭り
(ノロが管轄地域の拝所を巡回し、祈願した。))
 - ・6月カシチー折目 (25日)
(綱引き・・・西原、前田、城間を始め、各地で行われた。)
稲作のない村落でも白米飯を食べる。小湾では赤飯を食べる。
 - 7月 ・タナバタ (七夕)・・・(お墓の掃除、お盆の案内)
 - ・盆行事 (ウンケー<13日>、中日、ウークイ<15日>)
(エイサー<内間、沢岬では戦前から>)
(ウークイの日に獅子祈願を行う集落もある・・・仲西、勢理客等)
供物は、さとうきび、アダンの実、すいか、みょうが、からすうりなどの
農作物や野生の木の实。
 - 13日 ウンケー雑炊・団子
 - 14日 里芋と蕨 (ひゆ) の和え物
 - 15日 重箱、紙銭 (ニチャビ・カビアンジムン)
 - 8月 ・ヨウカビー (妖火日) <8日～15日>
 - ・シマクサラシ (8日)「シマクサラサーともいう」
(悪疫が集落に入って来ないように、牛や豚の骨肉を左縄で集落の入り口に下げる。<結界>・・・勢理客では現在も実施されている。)
 - ・ハチグアチカシチーウイミ (八月強飯折目<10日>)
(小豆ご飯を仏壇に供える。)
 - ・ジュウグヤー (十五夜祭、中秋の宴)・・・勢理客、仲西、内間等
俵型の米粉餅に茹で小豆をまぶしたフチャギを作る。
 - ・屋敷の御願・・・火之神、屋敷の四隅神に家内安全祈願。
 - 9月 ・キクウザキ (菊御酒・9日)
(酒に菊の葉を浮かべて火之神や仏壇に供えて、健康祈願)
(菊の節句、重陽の節句・・・冊封使歓待の「重陽の宴」)
 - 10月 ・タントウイ (種取り祭)・・・稲の苗を苗代に蒔く行事
(この月は行事があまりない・・・「アチハティジュールガツ」
米飯または握り飯、前田では米のない家へ握り飯絵を配る習慣があった。)
 - 11月 ・トゥンジー (冬至)・・・「トゥンジージュシー」
(冬至正月などともいう・・・中国では暦が改まる)

田芋、田芋入り雑炊を食べる。西原は親兄弟へ雑炊を届ける。

1 2月 ・ムーチー（鬼餅 主に8日）

月頭、クバの葉に包んで蒸した餅を食べる。米粉だけの餅もあるが、黍や芋を混ぜた餅が多い。子どもの生まれた家は紅白の餅を作り盛大に祝う。

（正月豚の準備）牧港はこの日に豚を屠殺し、血炒めと豚汁を供える。

（ウガンブトウキ＜火之神＞ 24日）

花米、酒、ウチャヌクを火之神に供える。

（27～28日）正月用豚を屠り分配する。肉・骨は塩蔵し、内臓・血は血イリチャーや臓物料理を作る。

（トウシヌユル・・・大晦日30日）

白米飯、豚汁、血イリチャーを食べる。

3. 浦添に伝わる昔話、民話について

（1）日本の昔話

『日本昔話事典』（稲田浩二外編）によれば、口承の民間説話を昔話、伝説、世間話に三分類して「昔話」の語を学術語として位置づけようと試みたのは柳田國男であるとしている。柳田は、『日本昔話名彙』において、「冒頭に必ず「昔昔あるところに」という一句を副えて語る「ハナシ」が昔話であり、信じられることはなく、めでたし、めでたしの結末句があるなど話の型があり文句がある。これに対して、伝説は、ある村里に定着していて、信じられており、話の型は決まってなく、話者により長くなったり短くなったり自由に話されるとしている。また、昔話の分類として、柳田は、神話を引き継いだ「完形昔話」、神話のモチーフの一部を持つ「派生昔話」、「その他」に分類しているが、関啓吾は『日本昔話集成』において、「動物昔話」、「本格昔話」、「笑い話」に三大分類している。

（2）沖縄の昔話

一方、同事典によると、「沖縄の昔話の採集記録は寛保3年（1743年）に

『球陽』外巻として編集された『遺老説伝』を嚆矢（^{こうし}始まり）とする。約170話の伝説、昔話、世間話などが収められている。発端句は、昔、昔の話ですが、という意味の方言が用いられ、結末句はウッサマディーなどの方言が用いられることが多い。沖縄県の昔話の特徴の第1は、伝説、世間話など他の民間説話と混然として存在し、昔話独自の体系を認めることが困難な点であろう。第2は、伝承態度における事実伝達性である。語り手は、伝説、世間話と同じように事実であった出来事として伝承する傾向が強い。それは、第3の特徴である由来話（動物由来、年中行事由来など）へ傾斜していることと関連している。こうした特徴を持つ沖縄の昔話は、『日本昔話名彙』、『日本昔話集成』とはまた異なった視野での理解や分類が必要であろう」としている。

（3）浦添の昔話

因みに、『遺老説伝』に伝わる浦添間切の説話として、①元旦に辺戸及び吉方の二水を献ぜしこと ②浦添郡安謝邑の内間大親、小松三根を植えて祀り情願を遂ぐるのこと（寄明森由来） ③浦添郡中間邑、子丑日に稲を播かざるの由来のこと ④浦添郡城間邑の羽地祝女、海中に溺死し、古重嶽に葬られしこと（古重嶽由来） ⑤浦添郡中間邑の文格、大力大食のこと ⑥浦添間切安波茶村友盛嶽

由来のことの6話が採集されている。

なお、経塚に伝わる「日秀上人の金剛嶺碑伝説」は、歴史書『球陽』巻三と、『琉球国由来記』及び『琉球国旧記』に記述されている。

ところで、浦添市史編集委員会は、昭和56年に浦添市仲間から港川の18字に伝わる民話の採集調査を行い、235人の話者から1,280話を採録している。その内訳は、動物昔話88話、本格昔話259話、笑話213話、伝説589話、世間話54話、民俗47話、歌30話となっている。浦添市の民話は、昔話では、約半数が本土と共通の話型で語られており、沖縄本島の中の比較では、国頭などの農村部と、那覇・首里などの都市部の中間的な性格が強く、浦添市の歴史性や、地理的な位置を反映した性格を帯びている、としている。

今回「方言劇」として制作した「モーイ親方」も首里などの昔話が人の移動と共に浦添に伝わったものであり、まさしく上記性格を反映したものとなっている。

また、本稿では、同調査において特に優れた民話とされた4話「猿長者」、「灰坊」、「チブルバチの話」、「ハブの子守り」と、「日秀上人の金剛嶺の碑」を別添資料に添付して紹介する。

4 文化振興・教養学部としての試作・実践について

当学部としては、うらそえの文化を伝える方法として、浦添に伝わる昔話から「モーイ親方」と「母の木」を選定し、それぞれウチナーグチの劇と紙芝居に仕立てて上演するという実践を試みた。

(1) 方言劇「モーイ親方」の脚本作成と実践について

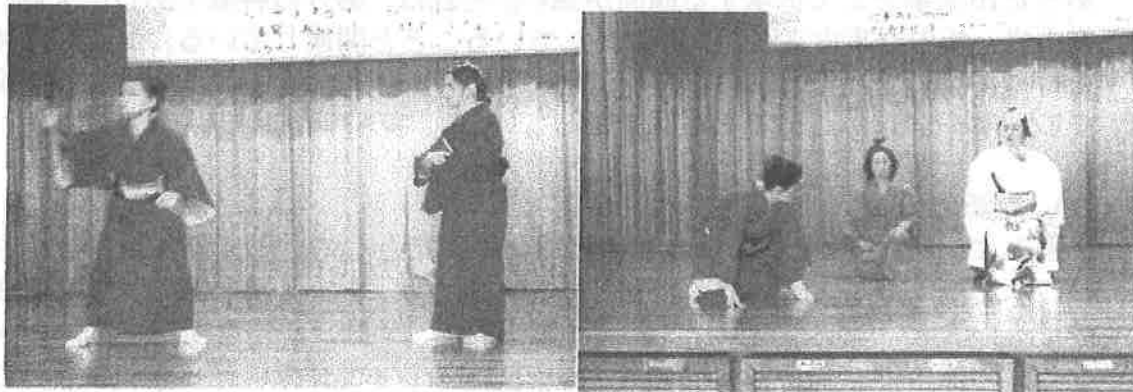
モーイ親方は、実在する人物「伊野波盛平」のことで、盛平は、1694年に那覇市首里に生まれ、47歳のときに三司官に就任し、政治、外交面で活躍した。伊野波家は、護佐丸の子孫(盛平は八世)で現存する旧首里士族である。

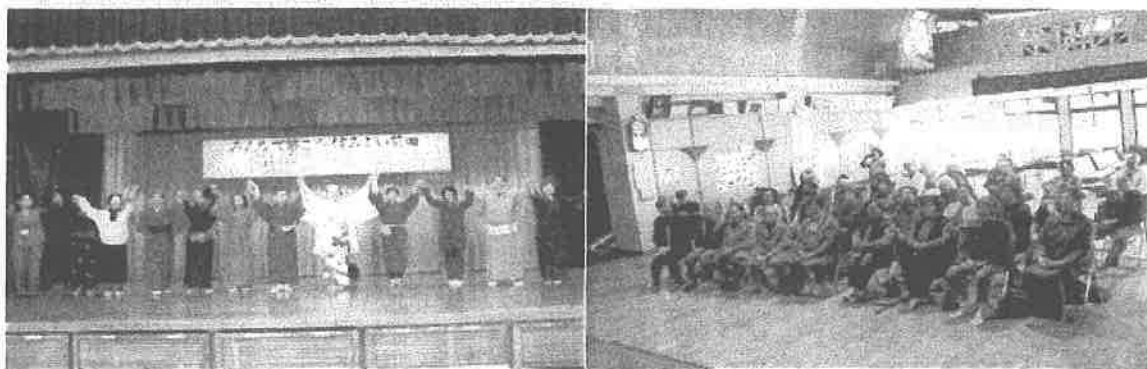
モーイ親方の頓智は伝説となり、沖縄各地に伝播し、各地で語り継がれてきている。当学部としては、ウチナーグチの劇を作成するにあたり、子どもから大人まで親しまれている浦添に伝わる「モーイ親方」を選定し、脚本を制作したものである。

さらに、方言劇の実践にあたっては、学生自身が役者となって上演するという試みたところである。

(脚本は別添参照)

「モーイ親方」上演写真 前田ふれあいサロンにて





(2) 紙芝居「母の木」作成と実践について

「母の木」は、浦添市の石川きよ子さんが昔話を採集し、活字化したものである。「九年母」の由来譚として語られているが、小学校の道徳学習（母への思い）の教材として活用されている昔話である。当学部においては、紙芝居としてリメイクするとともに、台詞部分をウチナーグチで語る構成とした。これについても、学生により上演を試みたところである。

ここでは、紙芝居の写真を紹介する。

（脚本は別添資料参照）

（紙芝居）「母の木」写真



III 成果と課題

浦添の伝統行事の見聞を通して、浦添市がかつては豊かな農村であったことを再認識したが、都市化していく中での農耕儀礼の継承はさまざまな困難を伴うのではないかと危惧するところである。今回の伝統行事の見聞において、自治会

長や伝統行事保存会長に伝統行事の由来や継承の問題点などを伺うことができたが、各地域の伝統行事担当者を囲んだ座談会などを開催して、伝統行事の現状や問題点を語ってもらうことも検討すべきであったと思われるところである。

また、「方言劇」と「紙芝居」については、「市民大学新年会」、「前田地域ふれあいサロン」、「浦西地域ふれあいサロン」、「市民大学フェスティバル」での上演を行い、着実に成果を上げているところである。今後は自治会などの行事への参加や、学校における子どもたちの上演支援、さらに、各地域の伝統行事の由来や昔話などの脚本制作につなげていければ市民大学の目指している地域・学校支援の一助になるのではないかと考えるところである。

IV おわりに

伝統行事は、祭りの前に地域の守り神である御嶽や根屋の拝みなどの神事が行われていたが、司祭者は自治会長や自治会役員であった。勢理客の獅子舞は演舞の前にも出演者全員による獅子御願があり、小湾アギバーリーも参加者全員による祈願が行われたが、伝統的行事の司祭者がノロという女性から、自治会長等という男性へと交代している。伝統行事が社会組織的な性格を持つ以上やむを得ない経過であるかもしれない。これは、何も浦添市に限ったことではなく、沖縄全域に言えることではあると思われる。

伝統行事のもう一つの特徴は、保存会を組織して継承に努めている自治会が多いことである。

浦添市史第四巻「年中行事」の執筆者である津波高志氏によると、浦添市の古村落的集落として仲間、前田、安波茶、伊祖、牧港、西原、沢岬、内間、勢理客、小湾、仲西、宮城、屋富祖、城間の14村落があるとされる。そのうち、小湾と城間は、米軍用地としてほぼ全集落接收されたため、別の地域に移住して集落を形成した。

これについて、稲福みき子は、自治会形成の面から屋富祖、城間は解体型、仲間、前田は地元型、内間、小湾は二重組織型（地割）であるとしている。今回、見物した西原地区は地元型に分類されるのであろうか。

西原地区のもう一方の特徴は、行政区は西原区として一まとまりであるのに、戦後、物資供給の便宜上、地域を一区、二区に区分けされ、各々自治会を組織したきわめて特殊な形態をもっていることである。こういうことから、一区、二区の区民が西原区として団結するためにも西原大綱引きは重要であり、綱引きを西原区民の「絆」の象徴としているのである。綱引きは、コミユニタス（肩書のない人格的交流）を実現する力があるとされ、伝統行事のもつ地域民の一体感を生み出す原型であるともいえるのではなかろうか。

きわめて少ない見聞ではあるが、いずれの伝統行事も、都市化していく中での農耕行事・儀礼を後世に継承していくためのさまざまな困難を超えて、後継者を養成し、継承のための知恵を出していることが認められ、分けても長老方の伝統行事に取り組む姿に頭の下がる思いであった。



卒業研究

地域学校支援

学部名：コーディネーター養成学部

氏名：金城 朱美

1. テーマ

～ながら見守り隊をつくろう

2. テーマ設定理由

私は、6年程前から交通安全見守りを行っていますが、子ども達の表情から朝のあいさつ、声かけがとても大切だと思っています。子ども達が元気に登校して気持ちよく学べるように、毎日楽しく笑顔で過ごせますようにと願っています。昔に比べると子ども達を取り巻く環境も変わってきて、異年齢の方たちとの交流や関係も希薄になっています。子ども達には地域の皆様にも関心を持ってもらい、地域ぐるみで見守り隊をつくる事によって、安心安全を図ると共に地域の活性化にもつなげていけたらと発案しました。

3. 項立て（概要でも良い）

1) テーマ設定理由

2) 研究内容

(1) これまでの私自身の活動について

(2) 子ども達を取り巻く安心安全の問題

- ・浦添市内の子どもが関係する事故発生件数と時間帯
- ・不審者情報
- ・前田小学校区内での交通安全指導者等の取り組み

3) 考察

4) これからの取り組み（～ながら見守り隊をつくるには）

5) まとめ

1) テーマ設定理由

私は、6年程前から交通安全見守りを行っているが、子ども達の表情から朝のあいさつ、声かけがとても大切だと思っている。子ども達が元気に登校して気持ちよく学べるように、毎日楽しく笑顔で過ごせますようにと願っている。昔に比べると子ども達を取り巻く環境も変わってきて、異年齢での交流や関係も希薄になっている。子ども達に対して地域の皆様にも関心を持ってもらい、地域ぐるみで見守り隊をつくる事によって、安心安全を図ると共に地域の活性化にもつなげていけたらと思い本テーマを設定した。

2) 研 究 内 容

(1)これまでの私自身の活動について

私は、沖縄県の交通安全推進員として、月2回だが交差点の立哨と見守りを行っている。朝は特に交通量が多く、信号機もないところなので、できるだけ毎日立哨して子どもたちが安全で安心して登校できるように見守る必要性を感じている。

(2)子どもたちを取り巻く安心・安全の問題

普段の生活で「意識して」登下校の時間帯に買い物や庭木の水やり、散歩などを行う。「見ている」というメッセージになり見守り合う関係を構築できれば、子どもたちの安全確保に大きく役立つと考えられる。

(沖縄県でも「ちゅらさん運動」で安全安心に暮らせるまちづくりということが提唱されている。)

① 浦添市内の子どもが関係する事故発生件数とその時間帯について (西原町、浦添市内の事故発生件数)

15歳以下(幼児～中学生)

	平成23年	平成24年
けが	9名	2名
軽いけが	88名	78名
計	97名	80名

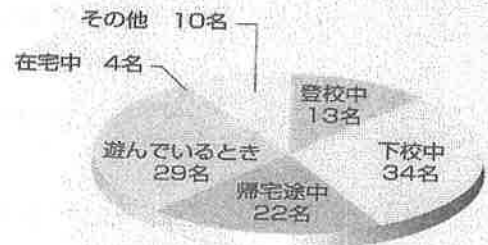
- (原因) ○とびだし ○横断歩道ではないところから渡っている
○駐車場でやっているキックボード、スケーターなど

浦添市の防犯ボランティア団体

団体数 66 団体
会員数 1788 名
青色回転灯 21 団体 33 台

※浦添警察署よりの聞き取り調査

被害に遭ったとき、子どもは 何をしていたか？ (就学児の被害者112名による)



資料:警察庁

② 不審者情報について

平成24年4月～平成25年2月までの市内の幼稚園、小学校、中学校における不審者情報
(資料提供:浦添市教育委員会学校教育課)

【月別発生件数】

月	件数
4月	1
5月	2
6月	3
7月	0
8月	0
9月	1
10月	4
11月	4
12月	2
1月	6
2月	2
計	25

【被害児童・生徒数】

	男子	女子
幼稚園児	0	1
小学1年	2	4
小学2年	1	3
小学3年	1	4
小学4年	0	3
小学5年	0	4
小学6年	0	2
中学1年	0	1
中学2年	2	2
中学3年	0	2
計	6	26
合計	32	

【時間帯】

午前・・・7件	午後・・・18件
---------	----------

不審者情報の一例

(資料提供: 浦添市教育委員会学校教育課)

- (1) 発生日時 平成24年6月29日(金) 午後3時頃
- (2) 発生場所 国道58号線「居酒屋ありんくりん」付近
- (3) 被害児童 小学校2年女子1名
- (4) 概要 女子児童が帰宅途中、国道58号線「居酒屋ありんくりん」付近で20代の若い男性が突然女兒の前に現れ、下半身を露出した。女兒は驚いて自宅に逃げ帰って母親へ報告する。(6/13(水)にも牧港小の女兒が同じような事案に遭遇している)

- (1) 発生日時 平成24年10月26日(金) 11時30分頃
- (2) 発生場所 浦添市港川2丁目の「宮城歯科」前路上
- (3) 被害生徒 中学校1年女子生徒
- (4) 概要 女子生徒が登校のために発生場所(宮城歯科前路上)付近を歩いていると、近くの教会敷地に止まっていた白色の軽自動車が進んで来て、車から降りた年齢30位の男に「遊びに行こう、勿論お金はあげるから」等と声をかけられたが、「遅刻する」と言って学校に向かうと「学校はいいよ、どうせ行かないんだろう」と言いながら更に追ってきたので「先輩が待っている」と言って早足で逃げた状況である。それ以上追ってはこなかったが、男は58号線向けに行ったと思う。(女子生徒の説明により)
- (5) 不審者の特徴 身長は低く小太り、メガネ、ポロシャツを着用、白色の軽自動車(ワゴンタイプ)に乗った年齢30歳位の男性

③ 前田小学校区内での交通安全指導等の取り組みについて

(前田小学校 長濱校長より聞き取り調査)

- ・生活指導部を中心に年に2回(10月・4月)に交通安全の見守りを行っている。(6年生の保護者が中心)
 - ・4月から正門前の道路が開通したので交通量も多くなり、2人体制で立哨している。
 - ・他にボランティア2人が毎日立哨している。
- 取り組みの要望として
- ・交通安全指導員(ボランティア)が絶対数足りないのでは、是非地域の方たちの力をかりたい。そしてできるだけ毎日続けてもらいたい。
 - ・のぼりを立てて意識を高めたい。
 - ・下校する時間帯に見守りをしていただきたい。2時～6時ぐらいがよい。

④ こども青少年課での聞き取り

- ・車で毎日、交替制でパトロールを行っている。（1日4回市内の巡回）
- ・見守りでいいのは自分の家の前で5分間立つ事。

3) 考 察

子どもたちが安全で安心して登下校するには、見守りがいかに大切か地域の環境づくりがとても必要だと痛感した。見守りで一番効果的なのは、それぞれの家庭が自宅前で5分間だけ、子どもたちを見送ってあげる。その時にお隣近所の方とのあいさつや「おはよう」、「いってらっしゃい」の声が飛び交う。できる時にできる範囲で無理のないように自然体で行われる地域として「～ながら見守り隊」が実現できると、安心安全の住みよい地域となる。

4) これからの取り組み

「～ながら見守り隊をつくる」には

- ・最初は、身近な知人、友人の有志を募って無理なく実践していく。
実践していく中で自治会の老人会、婦人会、各サークルに声かけして拡大していく。
- ・通学路マップを作成して、ウォーキングしている方や、犬の散歩をさせている方に通学路をコースに取り入れてもらうように呼びかける。
- ・子ども達の送迎をできるだけ、徒歩で行うように働きかける。
(学校の4月・10月の交通安全見守り週間に合わせて、送迎の徒歩運動を設定してはどうか?)
- ・交通安全の立哨ができる方に、月～金曜日のできる日・時間を登録して実行する。
- ・最終的には、自治会の各団体・サークル仲間、地域の各家庭などに呼びかけて、地域ぐるみの活動につなげていく。

～ながら見守り隊の一例

- ・庭木の水やり、外まわりの掃除しながら、
- ・ウォーキングしながら
- ・犬の散歩しながら
- ・ゴミを出しながら



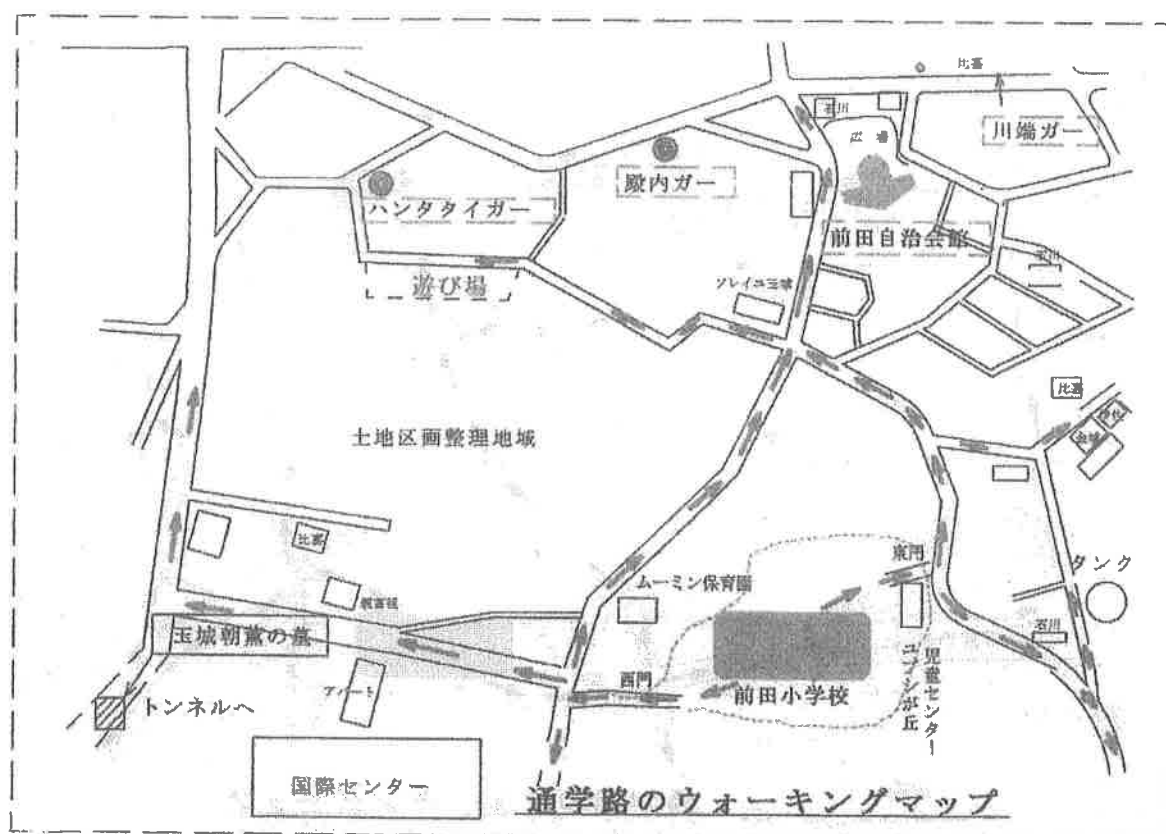
登校時の交通安全見守り



掃除しながらの声かけ



花木等の水やり



5) ま と め

浦添市でだこ市民大学では、うらそえ学からはじまり市長をはじめ、それぞれの各分野のエキスパートの方々から専門的なことを学び、とても有意義な時間を過ごすことができた。

私は、浦添で生まれ育ち、浦添で住まいを構えて、浦添が大好きである。安全なまちで安心して楽しく、子どもたちが健やかに育っていくように声かけ見守りを、できる限り続けていきたいと思う。

本市民大学は 1 人ひとりの学びの場を提供しているとても大切な学び舎だと思う。これからも継続して浦添市の人材育成につながっていけるように願っている。

卒業に向けて学部長はじめ事務局の方々のいろいろなアドバイスを受けながら卒論もまとめることができた。ありがとうございました。てだこ市民大学で学んだことと、多くの人との出会いを大切にしながら、志を同じにしている仲間たちと共に、地域で活動していけたらと思う。2年間お世話になりました。本当にありがとうございました。

卒業研究



学部名：地域・学校支援コーディネーター養成 学部

氏 名：玉 城 敏 子

1. テーマ

物を大切にする心・思いやりやいたわりの心・命を大切にする心を
育むために ～日本の伝統文化の生け花・茶道を通して～

2. テーマ設定理由

今日、子ども達の犯罪やいじめによる自殺等が多いことに心を痛めている。さらに、親による児童虐待や育児放棄等、現在は、子どもだけでなく子どもを取り巻く大人にも、物の豊かさより心の豊かさ、つまり「情操教育」が必要ではないかと実感している。

自分の特技である日本の伝統文化の生け花や茶道を通して、物を大切にする心、思いやりやいたわりの心、命を大切にする心を培うことで、豊かな心の育成に繋がることを願い、本テーマを設定した。

3. 項立て（概要でも良い）

1. テーマ設定理由

2. 本論

(1) 生け花・茶道の教育的意義について

(2) ボランティア活動の経歴

(3) 学校での実践

(4) 地域での実践

(5) 医療機関での実践

3. 成果と課題

4. おわりに（謝辞）

※参考資料・文献等

卒 業 研 究

テーマ

物を大切にする心・思いやりやいたわりの心・命を大切にする心を育むために

～日本の伝統文化の生け花・茶道を通して～

地域・学校支援コーディネーター養成学部

玉城 敏子

1. テーマ設定理由

今日、子ども達の犯罪やいじめによる自殺等が多いことに心を痛めている。さらに、親による児童虐待や育児放棄等、現在は子どもだけではなく子どもを取り巻く大人にも、物の豊かさより心の豊かさ、つまり「情操教育」が必要ではないかと実感している。

自分の特技である日本の伝統文化の生け花や茶道を通して、物を大切にする心、思いやりやいたわりの心、命を大切にする心を培うことで、豊かな心の育成に繋がることを願い、本テーマを設定した。

2. 本論

(1) 生け花・茶道の教育的意義について

美術教育による人格形成

芸術にしる美術にしる、楽しめなければならない。楽しんで良い物でなければならない。それによって慰めを得るし、心が向上しなければならない。

目から・・・理屈ではなく自然に、知らず識らず楽しみながら魂を高める。

教育とは「教え育む」と書く。育むものは学力だけではなく、よりトータル的な人間性そのものである。

例えば、人の気持ちを思いやる優しさ、社会や自然環境全体の調和を願う広い視野、生きていることに対する感謝、そして人間が持っている素晴らしい感受性「美意識」に働きかけ、開発していくこと。そのような子ども達が本来持っている美しい情操や善に満ちた心の萌芽をのびのびと育み伸ばしていく方法の一つとして花とのふれあいやお茶に親しむ「美育」がある。

花はそれ自体が自然界の芸術のように美しく、しかもまぎれもなく一生懸命生きている「いのち」である。花の美と出逢うこと、それは本来誰もが持っている「美の感動」や「いのちの尊さ」などと再会するひと時なのである。

そして、「生きる」ためのエネルギーを自分の中に見出していくきっかけになるのである。

(2) ボランティア活動の経歴

平成7年から、学校からの要請でクラブ活動に関わっている他、地域や医療機関でも活動している。

【経歴】

平成7～8年	沢岬小学校
平成9年	前田小学校
平成11～12年	港川中学校特殊学級、港川小学校クラブ活動
平成13～24年	浦城小学校クラブ活動
平成13年～	浅野浦自治会婦人会活動
平成15年～	医療機関での実践
平成24年～	浦添市適応指導教室「いまあじ」

(3) 学校での実践

【生け花の実践】

「物を大切にする心を育てる」

◎お花を生けるミニ花器づくり

空き缶や牛乳パック、包装紙、リボン等の廃品を利用し行事にちなんだ花器づくりをすることにより、物を大切にする心や創造力を育てる。

「命を大切にする心を育てる」

◎植物は生きている

植物も生きていて人の言葉を聞く力がある。

事例：ひまわりの育て方

良い言葉をかけた花壇と悪い言葉をかけた花壇の成長の比較

◎お花に関する和歌

美るわしき 花に懂る人こそは 花にも似たる 心持つなり

「花の扱い方」

命のある花を慈しみ、大事に扱う。

「お花を生ける」

①用意した花の中から一輪の花を選び、出会いを楽しむ。

②ハンドタオルを持って雫が落ちないようにやさしく扱う。

③花をよく見る。花の色や形、葉や茎など花と話をするように、花の一番美しい所を発見する。花からのメッセージが伝わるように。

④花器に水を入れ、花を生ける準備をする。

⑤ねらいをつけてスッと切ってスッと押す。あまりいじると弱くなる。

⑥生けた花を観賞する。

⑦お友達の花も見えてあげる。

「道具の始末」

周囲をきれいに片づけ、使ったハサミや道具にも感謝の心を持つ。



【茶道の実践】

「盆点前」

①思いやりやいたわり合い、そして感謝する心を培う。

お茶をいただく児童を3つのグループに分けてローテーションでお菓子やお抹茶をいただく。

②ご挨拶

正しい姿勢で愛情のこもったご挨拶は人の心を豊かにさせる。

③お茶のいただき方、お菓子のいただき方

「お先に、お手前ちょうだいします」

心と心のかけあいを声に出しておじぎの練習をする。お茶碗の正面を避けて三口半でいただく。お茶碗の正面を、お茶を点てた亭主の方に向けて「結構なお手前でした」と心を込めてお返りする。

【参加者の感想】

◎花器づくりは少し難しかったが、一生懸命作り、できたのでうれしい。

◎お花を生けるのははじめてなので心配でしたが、うまくできてよかった。

◎早くお母さん、お父さんにあげたい。お友達に見せたい。

◎今日朝ごはん食べてこなかった。お花の時間にうなだれたチューリップがあったので自分と同じかなと思い選んだ。桃の花とうなだれたチューリップを生けた。1時間の間に水を吸い元気に起き上がった。花の中の花弁まで見えていると喜び、自分もうれしくなった。（中学特殊学級の女の子の感想）

◎先生いわく、教室に入ってきて話もしないという男子生徒。ビデオ「日本の四季」をみんなで観賞した。春の桜の花からはじまり、夏の青葉、秋の紅葉に冬の雪景色と男の子の口が開いた。「きれいだった。枯木に雪の花をはじめて見た」と先生もびっくりした。美を通して心の扉を開いた瞬間だった。（男子生徒の様子）

◎花壇の草取り作業のとき、雑草も花もみんな一緒に引き抜いていたが、お花教室を重ねるうちに花と雑草の区別がついた。

【父兄からの感想】

◎子供がほころしげにクラブ活動で生けた季節の花を持ってきた、ひな祭りの節句の花「桃と菜の花」。しばらく眺めているうちにふるさとを思いだした。沖縄に来て時がたっていた。母を思い、亡くなった祖母を思い出した。娘とふるさとのことを語り合った。ありがとうございます。（お手紙にて）

◎いつもかわいらしいお花をありがとう。今日がクラブ活動の最終日と聞いてお母さんが学校にお礼に来た。花を通して家族の団欒が増えた。

◎お抹茶ははじめてで、苦いと思ったがおいしかった。

◎挨拶は少し照れたが声に出して言うと気持ちがいい。

【先生からの感想】

◎授業での集中力は20分ですが、お茶・お花のクラブ活動は45分間めいっぱいの集中力。「動」の生活の中で「静」の時間の必要性を実感する。



(4) 地域での実践

芸術の働きと花による環境美化

人間の情操を高め、生活を豊かにし、人生を楽しく意義あらしめるものは実に芸術の使命であろう。春の花、秋の紅葉、海山の風景を眺める時、文芸美術の素養ある人にしてその目を通す時、言い知れぬ楽しさの湧くものである。

四季折々に織りなされる景観美、季節の移ろいに親しみ草花を愛で自然の魅力を心で感じ取ってきた。

物質社会に陥った現代では自然破壊が進み、私達の命までも脅かされるようになってきた。改めて命の尊さを再認識する時代を迎えている。

浅野浦地域は、学校と大型スーパー、住宅等が密集しており、道端に空き缶やゴミのポイ捨てが多かった。

心豊かな明るい住みよい地域づくりと子ども達の健全育成を願い、学校・自治会・婦人会と連携し、学校周辺・公民館・パイプライン通り等での美化活動に取り組んでいる。

美しき家庭づくりを目指し、婦人会を中心にお花の講習会も行った。

毎年行われる浅野浦自治会作品展には、仲西中学校・浦城小学校の絵画・書道等、地域の優れ者の作品でいっぱい。心身ともに癒され芸術の使命を実感する。

平成24年9月に婦人会会員4名でネットワークを立ち上げ、浦城小学校職員室に生け込み奉仕をはじめた。浦城幼稚園壁面通りでは、道行く方々から花がきれいに咲き楽しませてくれてありがとうと感謝の声がかけられる。校長先生自ら生け込み場所のディスプレイをしてくださり、学校新聞等に花の写真を掲載する等、全児童に喜びを伝え、ポイ捨てがなくなった。



(5) 医療機関での実践

近年、自殺者の急増や精神疾患、生活習慣病、精神的な要因による病等が蔓延し、西洋医学のみでは解決できない病に苦しむ方々が急増している。

そうした中であって、精神療法や心の癒しが求められている。全人的な角度から相補・代替医療等、多様性医療が求められ、「統合医療」が世界的な潮流になろうとしている。

平成15年から那覇市首里にある「医療法人財団光輪会沖縄クリニック」で、作業療法士のもと芸術療法のお手伝いをしている。

【芸術療法の内容】

- ①色とりどりの花の中から自分の好きな花を一輪選び、お花との出会いを楽しむ。
- ②花と話をするように、花をよく見る。命ある花なので大事に扱う。一番きれいな所を発見して、生けてあげる。
- ③次に50個ほどの花器の中から自分の好きな花器を選ぶ。
- ④水を入れ、花を生ける。
- ⑤再び花を眺める。
- ⑥次にお茶室で和菓子をいただき、お抹茶をいただく。
- ⑦30分くらいで終了し、本人の気持ちを聞く。

Cさん：頭痛があったが、優しいピンクの河原なでしこと出会い、お抹茶をいただいたらすっかり良くなった。

Aさん：一週間前に受けたらその日はぐっすり眠れた。今日の花は、入院している友達に届けたい。

Bさん親子：知的障害のある女の子（5年生）。落ち着きがなく多動。迷わず瞬時に花をとり、花器をとり、花も切らずに生けた。回を重ねるごとに落ち着いてきたという。家でも実践している。母親は毎日がストレスで、ここに来ると安堵感があり癒され落ち着くという。

⇒ 結果として、頭痛は改善され、不眠や多動は緩和され、治療的効果が見られる。予防医学、健康増進につながっている。



3. 成果と課題

「成果」

花とふれあいお茶に親しみ、心の扉を開き自分の思いを言葉で表現した生徒。

萎れかかった花を慈しみ、生け、蘇っていく様子を見て花の生命力や命の尊さを知ったと喜ぶ生徒。

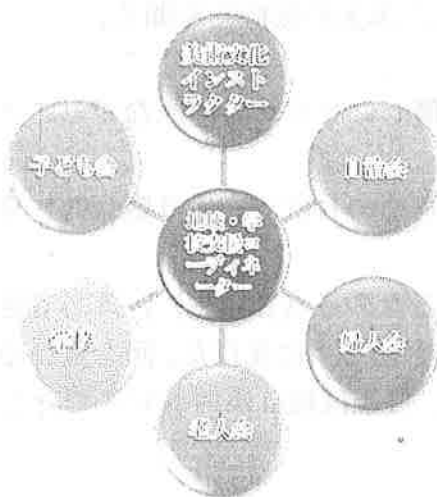
自分で作った花器に花を生けプレゼントする行為から、施しの愛の心とありがとうという感謝の心を受け止める児童。人や花の心、この心の交流が情操教育の真髄であると思う。

クリニックでは、自然治癒力を高めるインターフェロンが高まり、頭痛や不眠ストレスの改善・緩和につながった。明るい心や言葉、行いそして体の変化、家族、人生観、運命の変化につながっている。真に生きる力を育む花の力である。

「課題」

美しい家庭を築くことが、万人が求めている姿である。持続可能にしていくために、人材のネットワークが必要である。

これからもネットワークの充実拡大を図り、家づくり、地域づくり、まちづくりの一端を担っていきたい。



4. おわりに

市民大学で学んだ「うらそえ学」は大きな喜びであり、宝になった。行政のすべてを学べることは市民大学の大きな特色だと思った。

浦添市を深く知ることができ、誇りと勇気と感謝の心が持てた。

市民大学で学んだことを力に、今まで取り組んできたボランティア活動を卒業研究のテーマにすることが出来た。

他人の幸福を願い実践してきたことが、結果として自分自身も健康になり、幸福な道を歩んでいる。

二年間私たちのために貴重な時間をさいて「講座」をお引き受けくださった講師の先生方に心から感謝申し上げます。

やさしく私たちを励ましてくださった学部長の上地先生、事務局の新川さん・幸喜さん、チューターの川満さん、本当にありがとうございました。

二年間共に学んだ「地域・学校支援コーディネーター養成学部三期生」の皆さんとの出会いに乾杯♪



参考資料、文献等

- 「人・花・心」 (財)エムオーエー沖縄事業団)
- 「美による心と体の健康法」 (社)MOA インターナショナル)
- 「盆手前の勧め」 武者小路千家著 (千宗守)
- 「美術文化法」 (社)MOA インターナショナル)
- 「日本の四季」 (ビデオ)

